

戊辰漫錄

二

昭和三年六月下浣起筆

特別  
14  
1919  
404





176689

戊辰漫録二 昭和三年六月下浣起筆

○此日あきくゝの次初年出版の圖書を漁りて  
まじくくみするに難し、今も僅くはたの二書  
を得たり

一佛國政典

上巻 首尾二冊

此書の次六年出版刊司法省編纂  
大井定忠著、河橋大内文、買作  
麟祥校閲をもち、且巻首と権大法  
官齋津宣光漢文の序あり、趣心  
版也此書敢て孫とするに足らざる



(筆アノル) 女を梳に蔭緑



も首巻の表紙の表に藤波言忠の  
詞終る云々

の治七年より 明治天皇の御  
宗友に召出せられたる時、物うに  
る也

加藤弘之先生の齋教と  
階下と世に傳へし卒業せり

言忠記す

加藤弘之が此方を階下と進講し  
て書見せし、此者の首巻に宮  
内省圖書印を捺す、階下を賜  
りたる者なること推すべし、藤波



ハ階下の神子友とて進講の  
是に列せり事、亦亦の也

○今亦上巻の美術館に行き、板印社主催の浮  
世繪展覧會列品を見る、多量板畫、亦和  
紙、後のかけ紙、日と余の思を申す、四回  
目也、板畫、皆板方氏所為の、よのよ、初期の  
板畫、百二十一枚の内、鳥居清信、日清廣  
日清満、奥村政信、日利信、鳥居清信、日清忠  
清朝、石川景信等あり、重保元文、寛延、寶曆  
の時代の、皆クラレックス、屬す、余ハ、ん



宮日を経る必家の子あ多く、鳥長派の研究を  
 いたりの助をうけたり。但し此の外竹野の眼目  
 初功の心家又あつたり。宮日、車沙、宮日、  
 又あつたり。宮日の板書、宮日と七十二枚、  
 真に驚くべき体なり。宮日、板書、  
 所懐を解し、然れども余の今も  
 宮日、宮日、宮日、宮日、  
 一室に居るに幸し、六月廿日記

標印

市内版

女刊

東京日日新聞

編輯印刷發行所  
 大坂毎日新聞社支店  
 東京日新新聞發行所  
 地址：東京日新新聞發行所

ノビレ少將一行  
遂に救援さる

天幕を發見したマダレナ少佐  
機上から食糧を投下

【オスロー廿日發】(聯合) マダレナ少佐のイタリー飛行機は本日ノビレ少將  
 のテントに食料品等を落下するに成功した  
 【コペンハーゲン廿日發】(電通) チアムステーン新聞がオスロー來電として報ずる所によれば極地の  
 氷上に遭難中のノビレ少將一行を救援すべく數回の飛行を試みたイタリー飛行家マダレナ少  
 佐は本日の飛行に於いて首尾よくノビレ少將等の張つて居る赤色の  
 キャンプを氷上に發見し食料其他物資を投下して歸還した  
 【ローマ廿日發】(電通) ノビレ少將搜索中であつたイタリー飛行家マダレナ少佐は同少將一行のキヤ  
 ンプを發見し同少將がかねて要求せる物資三百キログラムを投下した旨公表された

昭和三年六月

(可認物便郵種三第日八月三年五十二治明)



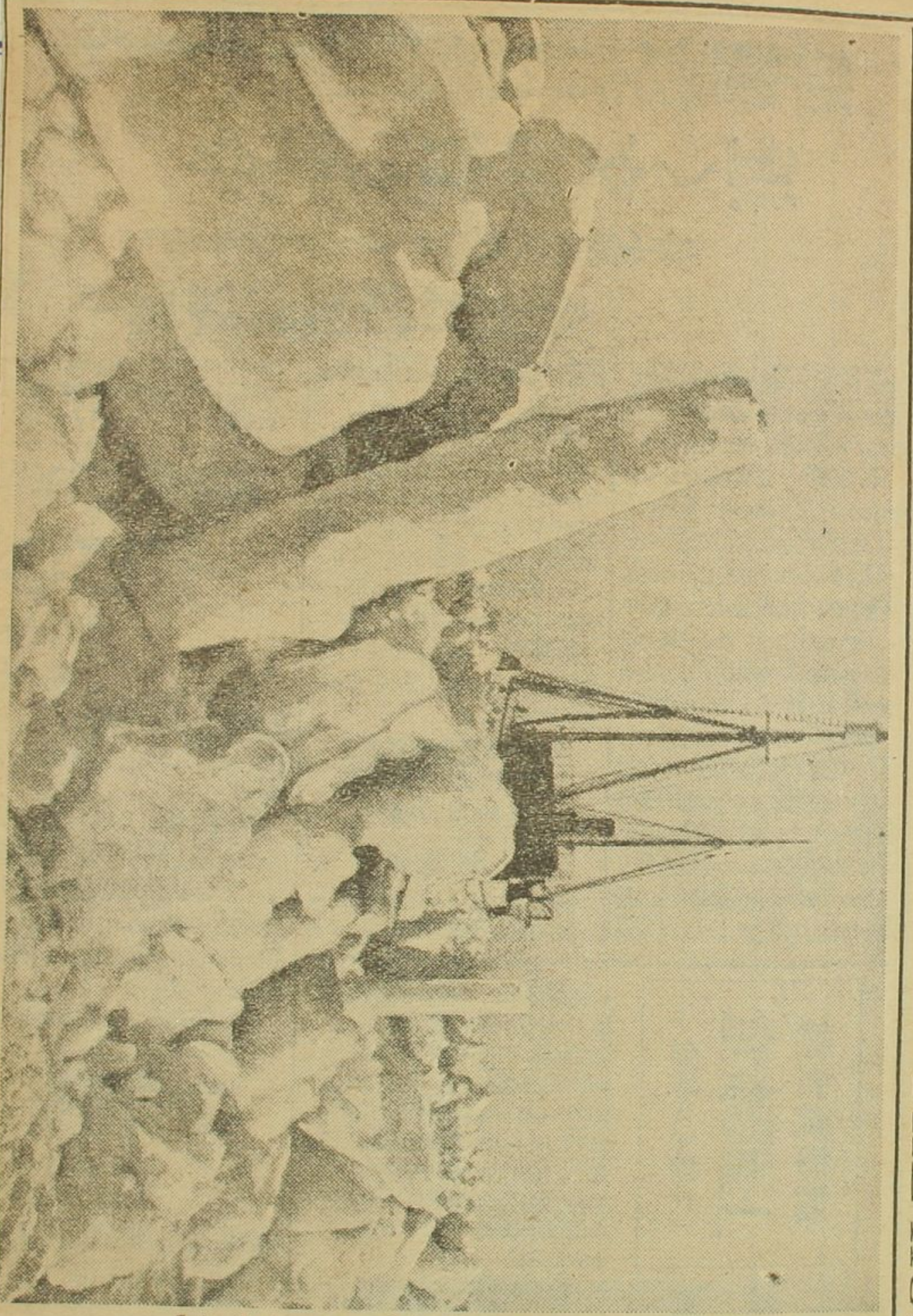
# 望み絶えた 氷上歩行の三人 携へた食糧も盡きた

ノビレ少将の一分隊

【オスロ廿六日發聯合】イタリヤ號の救助船よりの來電によれば、ノビレ少将一行の殘部並びに氷上着陸の際機を破損し修理ならずして右殘部と共に氷上にあるルンドボルグ大尉の救助は、一部の氷とけ或は融れて氷上機の積水が十分出来るやうになるを待つの外なく、それには三四週間かかるであらうと報じ、更にノース・イースト・アイランドの尖端ノース・ケープを目標に氷原上を歩みつけてゐるといはれる一分隊マルグレン、マリヤノ、ザツビ三氏搜索の望みは最早絶え彼等一行の搜索は所詮効なき者なる旨報じて來た尙右三翁の携へてゐる食糧は去る廿一日で既に盡きてゐる筈である

## ノビレ少将遭難の模様を發表

【ローマ二十七日發聯合】救出されたノビレ少将は飛行船イタリヤ號が氷山に衝突した際の事情を左の如く發表した。衝突のためイタリヤ號の乗組員搭乗席は機關部から切離され我々は氷上に取残され、機體だけは更に六哩も先方まで飛んで行きそこで後部から細い煙のやうな尾を曳いて消えて了つた衝突の際機關長ボメラ氏は墜落即死したので我々一行は厚く埋葬した



◇恐ろしい北極の氷塊

(一)

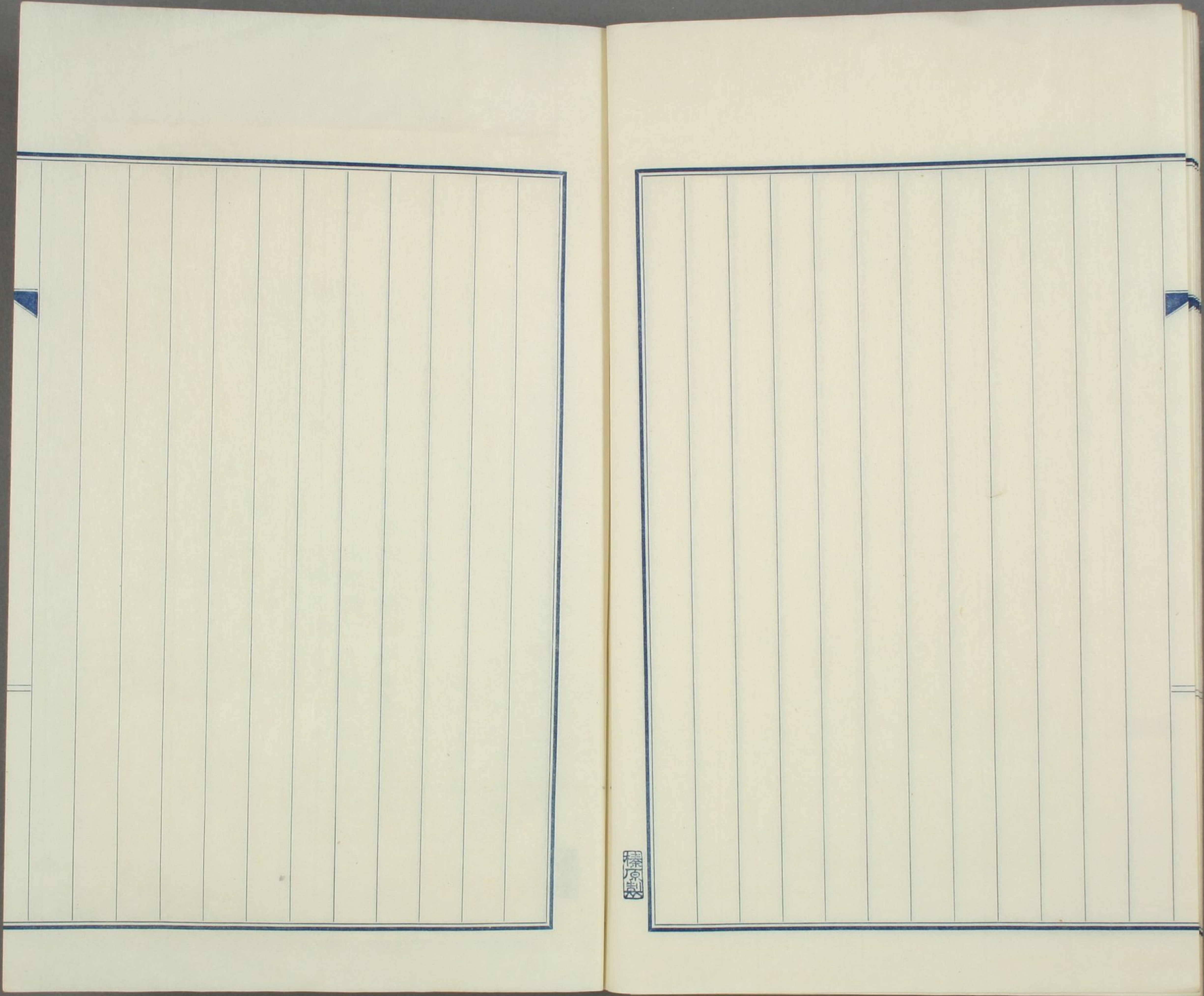
第七十八百四千八万一第

(可読物(新聞第三第))

THE HOCHI







紅



○頃日在ふい及お道より六十年前の因宗は忠  
か生て来比。乃ち明治二年の星野博士  
生を迎へて弘業故を尋ひし時から明治五年  
頃迄及門の氏名録を、確か星野博士の晩年  
三門人連が祝賀令を催した折、取調ぐた名簿  
と思ふ。其の原書は九原迄の誰んらの手  
にありておれのを留し比やうに記憶するに  
違してあるものもあるが、大体は同一と思  
はれる。此名簿は、**自分兄弟が入る**比の  
ハ明治二年のことか。自分漢  
の仕込七、其の明治に入つてからある、**自分十**  
**歳**より十一歳かある比。此名簿は勿論先







死

明治二年己巳秋七月

吉水貞雲

後藤昌雄

竹内又一

醫 ○羽田三花

○増山兼右郎

植村篤四郎

田中良八郎

浪川俊三

醫 ○桑原春隨

全 死



此は如北風多故也

今上も御辰巳下

水戸

水戸

死七

伊勢芳林及所

死三

中村算作

渡邊真助

岡部竹平

江口辰一郎

星直哉

関岩貞清

高橋香雲

田澤忠

渡邊耕三助

本多孝庵

藤井芳三助

西村十三郎

原哲三郎

明治三年庚午正月

死二

死一

徳重富作

渡邊廣吉

佐藤慶一郎

長岡石雄

佐藤文二

内山卯八郎

此は如北風多故也  
今上も御辰巳下  
水戸  
水戸  
死七  
伊勢芳林及所  
死三



元中子所置田ノ人ナレバ  
死ノ子ナ

長子牛也 亦乃介三六

死亡

飯塚全次郎

渡邊悳三郎

吉岡守宗

村岡武雄

塚野太三郎

横山新三助

野丹徹新

金田寅平

小林宮内

市島謙吉

新庄路條

死亡

市島典三郎

波多野要新

町田朋也

熊倉世作

熊倉崇助

熊倉典光

醫 三間玄秀

加藤実三郎

三浦三三郎

吉井為治

死 五

中藏子所置田ノ人ナレバ  
死ノ子ナ

死亡



○ 山崎 大守 山崎

○ 山崎 大守 山崎

信

○ 長岩 新雲 溪

長岩 新法 本

伊藤 旭 雄

明治四年 年未

石川 猪 右 郎

田崎 恒 右 郎

坂井 清 一 郎

市島 甲 一 郎

死七

死七

死七

北浦 多 助 中 五 郎

死七

天野 龍 進

小林 作 右 郎

福田 寛 什

○ 岩 溪 勇 右 郎

新 謙 讓

渡 邊 善 吉

井 川 帰 一 郎

○ 丹 英 達 三

○ 安 孫 子 右 右 郎

佐 木 昌 三

死

死



○ 中條多印 大藤 明治五年壬申

○ 大里 弘治

山際精三郎

米山栄三郎

萩 朋院

萩 昇降

吉松良三郎

鈴木守雄

佐藤寅次

賀川右郎

北浦原郡 笹岡村 大字 堤渡 直造 圓成 下 耕 不  
今郡 木崎村 大字 以島 見手 島 惠明 下 耕 不

水至河 七 子 下 空

北浦原郡 京ヶ瀬村 大字 瀬 尋常 高等 男子  
校 在 勤

水 至 河

死

明治六年癸酉

○ 宇尾野 森八

五幣 承吉

熊倉 謙三郎

萩 明了

渡邊 祐八

吉松 博房

本間 常吉

本間 雄

坂田 正彦



死之

今

北浦子取山事所古山山

陸軍少将三之現今對島守備

佐藤健作

福澤熊吉郎

石真久満太

鶴田國治

大澤典吾郎

西野泰造

植木

五幣傳作

阿部貞吉郎

五十嵐豊吉郎

中浦子取山事所

北浦子取山事所古山山

日取山事所

日取山事所

日取山事所古山山

新潟市古町通七番町北出喜七郎

新潟縣土木局

新潟市白山事表

五幣大平

師尾市右郎

大江重忠

小出由次郎

上杉亥之太

板澤知伯

大倉文之

三浦宗春

市

醫

○

三浦宗春



Fulton St. San Francisco  
Cal. U.S.

熊取  
ちりき又(其)物名

上あまのり

柏木義道  
浅見有孝

三原孝方

遠藤基三

坂田正彦

浅野喜右衛門

久須美孝

橋 他三

安部久太郎

○小田嶋儀一

○上末田サフランシロ

○  
○

○文の協会の主催した戊辰記念展覧會を  
他の団体も含む比一権威と特徴ありとい  
と苦心努力の甲斐ありといふ他、今も  
陳くんまの多くの逸事を集めた此の年  
後こそ疎列にわけては深更なる終つた總  
数なる若干、文者のゆゑ疎りよある。  
明治元年は用ひ比軍旗や友股や袴の意  
味を含む佩刀の類殊々注目を惹く目元  
きよの左の如し

一 明治天皇の御履(き)

白羽三喜

一 袴

宮内省出陣



一 朝廷に差出したる芝草の謝罪状  
二道 稲家

一 相領の刀

一 御即位の節おんを献上し給地球儀  
一 烈公自筆の石献上に付上表  
おん家

一 有栖川宮御佩用の刀

一 同 菊輪巻 直とりの一領

一 同 羅紗の官服 洋風

一 拜領の刀



一 羅紗の官服 洋風

錦家

一 浪糸大久保公遷都建議  
おん信子家

一 海軍先鋒 旗 大原家

久我大納言家

一 勅助緋の袴 三徳家

関东参行の時節物

一 旗籠二流 久我大納言家

小松宮御用



一慶長 奉正退野奏文書

開城東退奏文書

三條公龍表

田村新吉

一慶長四年 圖書

一政体書草案

福屋家

一創業硯

事務用朱硯

一三井家文書

白紙之年

具視書

褒賞状

三井家

一東幸供奉支度料月手当帳簿

一宿泊勘定書

一総勘定帳

総額百十萬とあり 三井家

一郭寛院宮日記 一冊

一曰 詠学 一冊

一岩倉公萬雄の被服 襦袢一品

公より叔母の白と進つたる書翰

一滋淳子身 衣帽子 垂衣



一 洋行の時佩用の刀

一 御誓文兼<sup>ニ</sup>連署<sup>ノ</sup>字<sup>ニ</sup>三帖

一 御即位禱度<sup>ノ</sup>字

一 木戸公建白書

一 海律全書 <sup>フレデリック</sup>二冊 <sup>自筆</sup>

榎本四花宮内省<sup>ニ</sup>献<sup>ス</sup>字<sup>ニ</sup>三帖

一 錦の肩章 <sup>数有</sup>



一 明治二年詔令書 <sup>数有</sup> 大隈家

一 明治二年吉原制札 <sup>帯刀入<sup>ノ</sup>家<sup>ヲ</sup>核<sup>ス</sup></sup>

一 幕外回奉<sup>ル</sup>行<sup>ハ</sup>神<sup>ノ</sup>戸<sup>ノ</sup>撤<sup>ル</sup>退<sup>ル</sup>際<sup>ノ</sup>際<sup>ノ</sup>の  
文書 <sup>数有</sup> 永見氏

一 明治天皇御即位の時用<sup>ハ</sup>ら<sup>レ</sup>ん<sup>ガ</sup>字  
大隈家の正社<sup>ニ</sup>表

一 前島男江戶遷都<sup>ニ</sup>連<sup>ル</sup>書  
一 総督官取<sup>ル</sup>後<sup>ニ</sup>和<sup>ス</sup>文<sup>ノ</sup>、<sup>ハ</sup>氏<sup>ノ</sup>文<sup>ノ</sup>記



一 秀野公官印

一 薩摩守政府印

一 前原奥平書簡

一 小中村清矩風箏を江戸に奉迎の長歌

一 四十八文字新書 五枚

以上家系員出陣の由

一 柳川春三中外形を愛りの扁書 指合つき

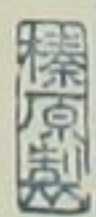
一 江蘇新集集首の扁書

尾信小式

一 毛利家、物入り字記者書名

以上天皇御ちし年款御自筆也

録、印刷日録、在り



○六月廿四日午後文の協合二十内年を記念するは是  
戊辰合を大隈公館にいづく、宰相(一木)内打(野月)  
谷田大使芳来宿兼に合員二百餘名大席を  
留席を存せず、会長の開合の致意に次ぎ壇  
原正直英将の演説を以て合の致意を外人に告  
ぐ、田中内閣總理一木宰相即日内打の祝辭  
あり、露田大使の英語祝辭終り、高田博士  
金子り壽交りの演説を試み、的沈維彰の  
氣が漲り、十數の苦心こころ酬へし、昨日よ  
り陳列に没致し、演説合を先づ先づ来  
度と合員を催進せしめ、茶菓を賜り  
て散す、此合を援助するは元法家より寄せ







昭和三年六月 午前十時より午後四時迄 牛込早稻田 大隈會館に於て  
廿五日廿六日

# 明治戊辰記念展覽會出品目録

主催文 明協會

牛込區早稻田町三十四番地・電話牛込三五四二

建設日本の色彩の濃厚な明治元年(戊辰)を中心としましたが、多少前後に互ふことはまた止むを得ないこととした。この催に就ては渡邊幾治郎、藤井甚太郎、薄井福治、上野竹次郎、尾佐竹猛、中野禮四郎、小林堅三諸氏より非常なる御援助を受けました。こゝに秘蔵の貴品を御出陳下さつた各位に厚く感謝し併せて右諸氏に深甚の謝意を表したいと思ひます。

宮内省御所蔵

明治天皇御所用の洋鞍 (御正装用)

榎木武揚の海律全書 オルトラン原著

宮内省圖書寮殿蔵

東征大總督有栖川宮熾仁親王所用の直綴 (明治元年)

筒袖 (明治元年)

短刀 (明治元年)

臨時帝室編輯局殿蔵

明治天皇御即位服並調度之圖 (明治元年)

明治改元書類 寫眞 (明治元年)

五條の御誓文 寫眞(東山文庫御所蔵) (明治元年)

明治天皇御即位式所用の水戸藩献上地球儀の圖

ヘニオプスキー伯追想と旅行記 (一九〇四年ロンドン發行)

クルゼンステルン追相録 (一八五六年ロンドン發行)

ゴロニーニ航海記 (一八二四年ロンドン發行)

ホール朝鮮西海岸及琉球諸島探險航海記(一八一八年)

ホークス米國艦隊の支那及日本海遠征記(一八五〇年)

ホキツテンガム遠征記 (一八五六年ロンドン發行)

ホチソン長崎箱館滞在記 (一八六一年ロンドン發行)

オリフアント「エルデン」卿日本支那派遣に關する回想 (一八六〇年ニューヨーク發行)

オールコック大君の都 (一八六三年ニューヨーク發行)

レーンブル、デキンス「バークス」傳(一八九四年)

レデスデール追想録 (一九一六年ロンドン發行)

アダムス日本歴史 (一八七五年ロンドン發行)

グリフキス皇 國 (一九一二年ロンドン發行)

ヒコ日本人物語 (明治二十八年東京發行)

クラーク 勝 安房 (一九〇四年ニューヨーク發行)

レーンマン米國在留日本人 (一八七二年ニューヨーク發行)

シーボルト最終日本紀行 (一九〇二年ベルリン發行)

ニューヨーク新聞 (萬延元年第一回遣米使節記事所載)

ロンドン繪入新聞 (元治元年及慶應三年日本關係記事所載)

戊辰官軍所用肩章 維新前後諷刺畫 (一、二)

世態雜觀 (二、三) (維新前後刷物)

よせあつめ (維新前後刷物)

五國異人横濱上陸圖 (文久元年)

神武天皇御即位圖 (明治元年)

大阪行幸之圖 (明治元年)

トコトナレぶし 早稻田大學圖書館殿蔵

長崎醫學校規則 (明治元年)

乗合馬車廣告 (明治元年)

政體 (明治元年)

公議所法則案 (明治元年)

政體沿革誌 (明治元年)

貨幣取調書 (明治元年)

海外行人名書 (明治二年)

戊辰函館征討日記 (明治元年)

天主教探偵書 (明治初年)

御入城當時與向繪圖 (明治初年)

西洋事情 初編 福澤諭吉編 (明治元年) 三册

立憲政體略 加藤弘藏(弘之)撰 (凡例) (明治元年) 一册

泰西國法論 蘭ヒツセリナ講 津田真道譯 (明治元年) 四卷四册

外國事務 初編 福地源一郎譯 (明治元年) 一册

畢酒林氏萬國公法 西周助(周)譯 官版 (明治元年) 四卷四册

西洋經濟小學 (經濟小學の改題) 英イリス撰 神田孝平重譯 (明治元年) 二編二册

訓蒙窮理圖解 初編上 福澤諭吉編 (明治元年) 一册

寫眞鏡圖說 初二編 楊大昕(柳川春三)撰 (明治元年) 合本一册

英佛單語便覽 桂川甫策撰 (明治元年) 一册

興風集 松下郁整刊 (明治元年) 一册

東湖先生遺文 藤田彪撰 (明治元年) 一册

幽囚錄 吉田矩方撰 (明治元年) 一卷二册

南蠻寺興廢記 邪教大意附 杞憂道人(養鶴徹定)刊 木活本 (明治元年) 一册

松陰先生武教講錄 松下郁整刊 (明治元年) 二册

博物新編譯解 卷一・二 大森秀三譯(序) (明治元年) 二卷三册

校訂國史略 四刻 岩垣松苗撰 (明治元年) 八卷五册

祕事新書 點林堂主人撰 (明治元年) 一册

殉難前草 城兼文編 (明治元年) 一册

殉難後草 城兼文編 (明治元年) 一册

(田中光顯伯寄贈)

明治天皇田中伯へ御下賜の御衣 一着

柳原前光の詩 戊辰之冬甲城偶作 一幅

徳川慶喜の書 得心應手 一幅

日柳燕石の詩 戊辰榴月宿小郡驛記木戸氏話 一幅

西郷南洲の書 一幅

大久保甲東の書 一幅

桐野利秋の書 古之君子無友則 一幅

ウエーランドの經濟書 (福澤諭吉先生藏書印) 一册

明治天皇より三條公へ御下賜の御袴 三條公爵家蔵

三職盟約書 (明治二年) 一着

黒田開拓次官樺太赴任に臨み上れる對魯計畫意見書 (明治三年) 一通

木戸孝允書翰 大權集中國輝發揚の策論 (明治三年) 一通

廣澤兵助書翰 (木戸參議進退の事) (明治三年) 一通

民選議院設立の建白書 (明治七年) 一通

岩倉具視遭難時の着衣及所持品 (明治七年一月十四日) 數點

右遭難を伯母岩倉洗子に通知の書翰 (明治七年一月十四日) 一卷

蘭語活字 (四十本) 島津公爵家蔵

慶應年間の海外留學生 寫眞 (明治初年) 一包

鹿兒島磯全景 寫眞 (明治初年) 三枚

鹿兒島の紡績所 寫眞 (明治初年) 一枚

同所に招聘の英人技師 寫眞 (明治初年) 一枚

同技師の住宅 寫眞 (明治初年) 一枚

薩藩の軍艦春日丸と汽船三邦丸 寫眞 (明治初年) 二枚

英國歩兵操練 薩摩版 (明治初年) 九册

知環啓蒙 薩摩版 (明治初年) 一册

和譯萬國公法 (明治初年) 三册

アメリカ版四書五經 (明治初年) 四册

國事に關する宸翰 毛利公爵家蔵

同 寫眞 (明治二年) 一枚

戊午の密敕 寫眞 (明治四年) 一枚

同 寫眞 (安政五年) 一枚

明治天皇御即位の際献上せる地球儀原型 徳川侯爵家(水戸)蔵

右地球儀献上書 (徳川齊昭自筆) (嘉永五年) 一通



五條の御誓文 寫眞(東山文庫御所藏)	(明治元年)	一冊	博物新編譯解 卷一・二 大森秀三譯(序)	(明治元年)	二卷三冊
明治天皇大嘗會の圖	(明治元年)	二冊	校訂國史略 四刻 岩垣松苗撰	(明治元年)	八卷五冊
明治天皇御即位式所用の水戸藩献上地球儀の圖	維新史料編纂事務局殿藏	二枚	祕事新書 點林堂主人撰	(明治元年)	一冊
ヘニオブスキー伯追想と旅行記 (一九〇四年ロンドン發行)	(一九〇四年ロンドン發行)	一冊	殉難前草 城兼文編	(明治元年)	一冊
クルゼンステルン追相録 (一八五六年ロンドン發行)	(一八五六年ロンドン發行)	一冊	殉難後草 城兼文編	(明治元年)	一冊
ゴローニン航海記 (一八二四年ロンドン發行)	(一八二四年ロンドン發行)	三冊	田中光顯伯寄贈)		
ホーレル朝鮮西海岸及琉球諸島探險航海記(一八一八年)	(一八一八年)	一冊	ウエーランドの經濟書 (福澤諭吉先生藏書印)	慶應義塾大學圖書館殿藏	一冊
ホークス米國艦隊の支那及日本海遠征記(一八五〇年)	(一八五〇年)	一冊	明治天皇より三條公へ御下賜の御袴	三條公爵家藏	一着
ホキツテンガム遠征記 (一八五六年ロンドン發行)	(一八五六年ロンドン發行)	一冊	三職盟約書 (明治二年)		一着
ホチソン長崎箱館滞在記 (一八六一年ロンドン發行)	(一八六一年ロンドン發行)	一冊	黒田開拓次官樺太赴任に臨み上れる對魯計畫意見書	(明治三年)	一通
オリフアント「エルヂン」卿日本支那派遣に關する回想	(一八六〇年ニウヨーク發行)	一冊	木戸孝允書翰 大權集中國輝發揚の策論 (明治三年)	(明治三年)	一通
オールコック大君の都 (一八六三年ニウヨーク發行)	(一八六三年ニウヨーク發行)	二冊	廣澤兵助書翰 (木戸參議進退の事)	(明治三年)	一通
レーンブル、ヂキンス「パークス」傳(一八九四年)	(一八九四年)	二冊	民選議院設立の建白書 (明治七年)	(明治七年)	一通
レデスデール追想録 (一九〇六年ロンドン發行)	(一九〇六年ロンドン發行)	二冊	岩倉具視遭難時の着衣及所持品	岩倉公爵家藏	數點
アダムス日本歴史 (一八七五年ロンドン發行)	(一八七五年ロンドン發行)	一冊	右遭難を伯母岩倉洗子に通知の書翰	(明治七年一月十四日)	一卷
グリフオス皇 國 (一九〇二年ニウヨーク發行)	(一九〇二年ニウヨーク發行)	二冊	蘭語活字 (四十本)	島津公爵家藏	一包
ヒコ日本人物語 (明治二十八年東京發行)	(明治二十八年東京發行)	一冊	慶應年間の海外留學生	寫眞 (明治初年)	三枚
クラーク 勝 安房 (一九〇四年ニウヨーク發行)	(一九〇四年ニウヨーク發行)	一冊	鹿兒島磯全景	寫眞 (明治初年)	一枚
レーンマン米國在留日本人 (一八七二年ニウヨーク發行)	(一八七二年ニウヨーク發行)	一冊	鹿兒島の紡績所	寫眞 (明治初年)	一枚
シーボルト最終日本紀行 (一九〇二年ベルリン發行)	(一九〇二年ベルリン發行)	一冊	同所に招聘の英人技師	寫眞 (明治初年)	一枚
ニウヨーク新聞 (萬延元年第一回遺米使節記事所載)	(萬延元年第一回遺米使節記事所載)	二冊	同技師の住宅	寫眞 (明治初年)	一枚
ロンドン繪入新聞 (元治元年及慶應三年日本關係記事所載)	(元治元年及慶應三年日本關係記事所載)	二冊	薩藩の軍艦春日丸と汽船三邦丸	寫眞 (明治初年)	二枚
戊辰官軍所用肩章		三個	英國歩兵操練 薩摩版	(明治初年)	九冊
維新前後諷刺畫 (一、二)	(維新前後刷物)	二幅	知環啓蒙 薩摩版	(明治初年)	一冊
世態雜觀 (一、二、三)	(維新前後刷物)	二幅	和譯萬國公法	(明治初年)	三冊
よせあつめ (維新前後刷物)	(文久元年)	一冊	アメリカ版四書五經	(明治初年)	四冊
五國異人横濱上陸圖 (明治元年)	(明治元年)	一冊	國事に關する宸翰	毛利公爵家藏	一枚
神武天皇御即位圖 (明治元年)	(明治元年)	一冊	同	寫眞 (明治四年)	一枚
大阪行幸之圖 (明治元年)	(明治元年)	一冊	戊午の密敕	寫眞 (安政五年)	一枚
トコトヤレぶし 長崎醫學校規則 (明治元年)	(明治元年)	一冊	明治天皇御即位の際献上せる地球儀原形 (嘉永五年)	徳川侯爵家(水戸)藏	一臺
長崎醫學校規則 乗合馬車廣告 (明治元年)	(明治元年)	一冊	右地球儀献上書 (徳川齊昭自筆)	(嘉永五年)	一通
政體 政體沿革誌 (明治元年)	(明治元年)	一冊	米艦入港圖 (水戸烈公添書)	(嘉永六年)	一枚
貨幣取調書 (明治元年)	(明治元年)	一冊	萬國旗旗圖 (肉筆)	(慶應三年)	一冊
海外行人名書 (明治二年)	(明治二年)	一冊	萬國新聞		四綴
戊辰函館征討日記 (明治元年)	(明治元年)	一冊	鍋島直大着用明治二年制定大禮服	(明治元年)	一着
天主教探偵書 (明治初年)	(明治初年)	一冊	明治天皇御下賜の拵付短刀	木戸侯爵家藏	一振
御入城當時奥向繪圖 (明治初年)	(明治初年)	一冊	版籍奉還建言書 (明治元年二月)	木戸侯爵家藏	一通
耶蘇教件文書 (明治初年)	(明治初年)	一冊	大阪選都人心疑惑の鎮定並同地車駕行幸建言書 (明治元年三月)		一通
長崎醫學校件文書 (明治初年)	(明治初年)	一冊	國是一定誓約の建言及び會誓式 (明治元年三月)		一通
御沙汰書及見込書 (明治初年)	(明治初年)	一通	普通教育振興に關する建言 (明治元年十二月)	西郷侯爵家藏	一通
横濱東京邪宗門事情書其他	(明治五年)	二七綴	◇ 明治天皇御眞影 (明治五年西郷南洲に御親授)		
シーボルト書翰 (明治以前)	(明治以前)	一冊	天 孟 (東征總督參謀時代明治天皇御下賜)	寫眞	一軸
戊辰繪卷物 (明治元年)	(明治元年)	二冊	私學校綱領		
官員錄 (明治元年)	(明治元年)	二冊	◇ 五條御誓文發布當時の御宸翰(木戸孝允草案)	大隈侯爵家藏	一通
東京城日誌 (明治二年)	(明治二年)	一冊	大隈重信辭令書 (明治初年)		一通
決議錄 (明治二年)	(明治二年)	一冊	同 參與時代の直垂	黒田伯爵家藏	一着
市政日誌 (明治元年)	(明治元年)	一冊			
外務省日誌 (明治三年)	(明治三年)	一冊			
◇ 戊辰刊行の木版新聞 (明治元年)	(明治元年)	一冊			
中外新聞 柳川春三發刊 (明治元年)	(明治元年)	一冊			
内外新報 (明治元年)	(明治元年)	一冊			
公私雜報 (明治元年)	(明治元年)	一冊			
日々新聞 (明治元年)	(明治元年)	一冊			
遠近新聞 (明治元年)	(明治元年)	一冊			
江湖新聞 (明治元年)	(明治元年)	一冊			
帝王御譜 (明治元年)	(明治元年)	一冊			
首註陵墓一隅抄 五刻 津久井清影註 (明治元年)	(明治元年)	一冊			



明治初年に於ける黒田清隆建白集

(明治三年七月)

一冊

樺太に關する御沙汰書

(小中村清矩自筆)

(明治元年)

一卷

北海道開拓に關する太政官達書

(明治三年十一月)

一通

黒田清隆開拓次官鶴退を請ふの書

(前島男自筆)

(明治元年)

一卷

大久保利通書翰集 (群賢書翰の中)

(明治六年一月)

一通

仁和寺宮御成の記

(前島男自筆)

(明治元年)

二冊

西郷隆盛書翰集 (同)

(同)

一卷

薩摩政府印

(明治初年)

數通

木戸孝允書翰集 (同)

(同)

一卷

水原縣官印

(明治初年)

一個

靜寛院宮御日誌

橋本伯爵家藏

(明治元年)

前原一誠書翰

(明治初年)

一個

靜寛院宮御詠草

大原伯爵家藏

一冊

奥平謙輔書翰

(明治初年)

一冊

海軍先鋒總督旗

大原伯爵家藏

一旗

乗合はなし (維新の際の越後文書)

(明治六年一月)

五枚

大原重徳 自畫畫

(明治元年)

一幅

いろは四十八字新聞 (五號迄)

(明治元年)

一冊

澁澤榮一大藏省出仕時代の直垂

澁澤子爵家藏

一着

有司集覽

(明治元年)

一冊

澁澤榮一佩用の刀剣(大小) (明治以前佛蘭西まで佩用のもの)

由利子爵家藏

二振

金澤藩辭令書

(明治二年)

一通

五條御誓文案 (福岡孝弟、由利公正筆)

福岡子爵家藏

二通

瓦版陰徳太平記新圖

(明治三年)

一通

福岡孝弟政體書草案

福岡子爵家藏

一通

秋月種樹に與へたる山内容堂書翰 (彈正臺に關す)

(明治初年)

一通

福岡孝弟常用の珠硯

福岡子爵家藏

一個

築地居留地圖

(明治初年)

一枚

德川慶喜謝罪狀

花房子爵家藏

三通

明治天皇御前に進講の佛國政典

(明治六年)

二冊

文久二年遣歐使節一行二十四名寫眞

大鳥男爵家藏

五冊

永見徳太郎氏藏

(文久二年)

一通

南柯紀行 (大鳥圭介獄中記寫本全五卷)

三井男爵家藏

一冊

高橋美作守 (葡萄牙王弟死去の悔狀)

(文久二年)

一通

御東幸御用日記 (三井治郎右衛門自筆)

(御用留二十五冊の内)

一冊

大熊直次郎 (銅錢密積の支那人處分方交渉文書)

(文久二年五月)

一通

御東幸道中御用日記 (同)

(明治元年)

一冊

同 (長崎引田屋にて外人の日本人殺害事件の文書)

(文久二年六月十一日)

一通

東京行在中御用日記 (同)

(明治元年)

一冊

妻木源三郎 (支那人上陸禁止に關する交渉文書)

(文久三年七月)

一通

水川社行幸御用掛り日記 (同)

(明治元年)

一冊

河津伊豆守 (戊辰の際外國公使に救授方依頼の文書)

(明治元年一月十三日)

一通

御東幸御還幸御入用總勘定帳 (御東幸關係書類二百三十三冊の中)

(明治元年)

一冊

河津伊豆守 (長崎退去の際の文書)

(明治元年一月十四日)

一通

御東幸供奉而々支度料月手當人足揚帳 (同)

(明治元年)

一冊

諸邦藩臣連名 (幕府奉行退崎後の外交文書)

(明治元年一月十八日)

一通

御東幸ニ付御道中宿泊勘定書類 (同)

(明治元年)

一冊

大隈八太郎 (外人雇用の日本人札の件に關する文書)

(明治元年四月九日)

一通

御東幸御還書

野村三郎 (中野剛太郎運上所)

一冊

町田民部 (大隈八太郎外國事務局判事任命布達書)

(明治元年四月十四日)

一通

御東幸御用褒狀

長崎大繪圖

一通

長崎居留場全圖

(慶應二年)

一枚

御一新調達金褒狀

長崎地圖

一枚

長崎港全圖

(明治元年)

一枚

太政官札製造繪卷

上野竹次郎氏藏

一通

五條御誓文 (木版刷)

(木版刷)

一通

御東幸供奉用烏帽子、直垂、中啓

各一

一通

御誓文發布當時の御宸翰 (木版刷)

(木版刷)

一通

三井高福、三井高朗寫眞

下郷傳平氏藏

二枚

三條實美蘭之圖 (太宰府にて歸洛復官の命に接し酒宴を催したる時)

(慶應三年)

一幅

王政復古通告の國書

小堀鞆音氏藏

一通

同 和歌短冊 (太宰府發軔の時の作)

(慶應三年)

一枚

難波行幸原議

藤井甚太郎氏藏

一枚

同 京都に着したる時の作

(明治元年)

一枚

總督小松宮旌旗 (久我大納言筆)

田村新吉氏藏

二旗

松平容保和歌 短冊

(明治元年)

一枚

「奥羽追討」の旗

小旗

四枚

福岡藩兵の陣笠

藤井甚太郎氏藏

一蓋

葦山笠 (會津藩兵用)

田村新吉氏藏

一個

公議所日誌 前編 (徳川慶喜處分に關するもの)

(明治元年)

一冊

彈丸入肩懸 (同)

川勝鍊吉郎氏藏

一冊

江城日誌 (江戸に關するもの)

(明治元年)

一冊

徳川慶喜辰の上表

鎮將府日誌

一冊

鎮臺日誌

(明治元年)

一冊

徳川慶喜江戸歸還の届書

益頭尚孝氏藏

一冊

文久二年和蘭政府より日本使節一行に贈れる記念銀牌

(明治元年)

一個

三條實美關東鎮將辭表

小川邦孝氏藏

一枚

明治四年岩倉遣歐大使一行寫眞

原口初太郎氏藏

二十五枚

佛國公使レオン・ロッシユより徳川大君への書翰 (譯文添)

四月廿八日

一通

文久二年(一八六二年)遣歐使節一行寫眞帖

何盛三氏藏

一個

同 小笠原壹岐守への書翰 (譯文添)

(一八六七年十一月十七日)

一通

三條實美より奥州出陣中の四條隆謨に贈れる書翰 (八月廿六日)

酒井宇吉氏藏

三冊

慶應二年歐洲留學生林董、外山正一筆寫眞

小川邦孝氏藏

一枚

文久二年和蘭政府より日本使節一行に贈れる銅牌

三淵忠彦氏藏

一個

同 小笠原壹岐守への書翰 (譯文添)

(一八六七年十一月十七日)

一通

大村益次郎より奥羽の處置に關し林半七に贈れる書翰 (明治元年十月九日)

一通

一通

西園寺公望より山縣有朋の進退に關し四條隆謨に贈れる書翰

西園寺公望より山縣有朋の進退に關し四條隆謨に贈れる書翰

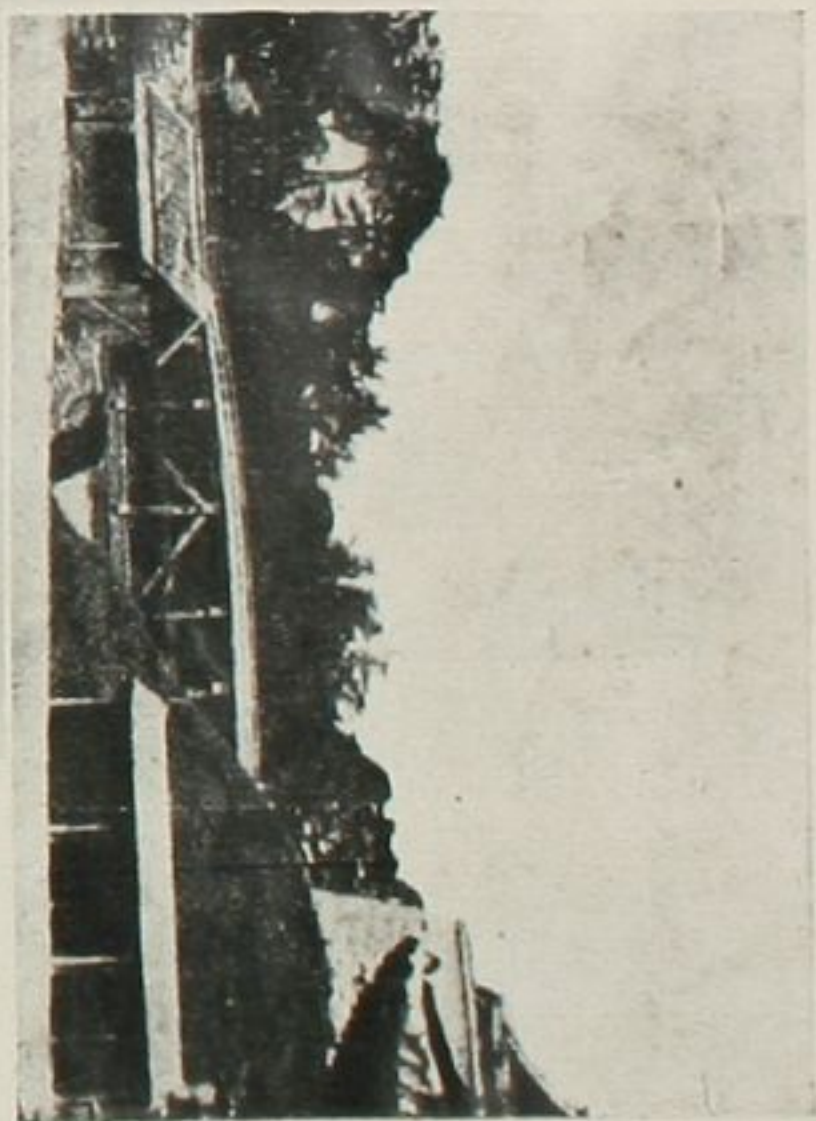
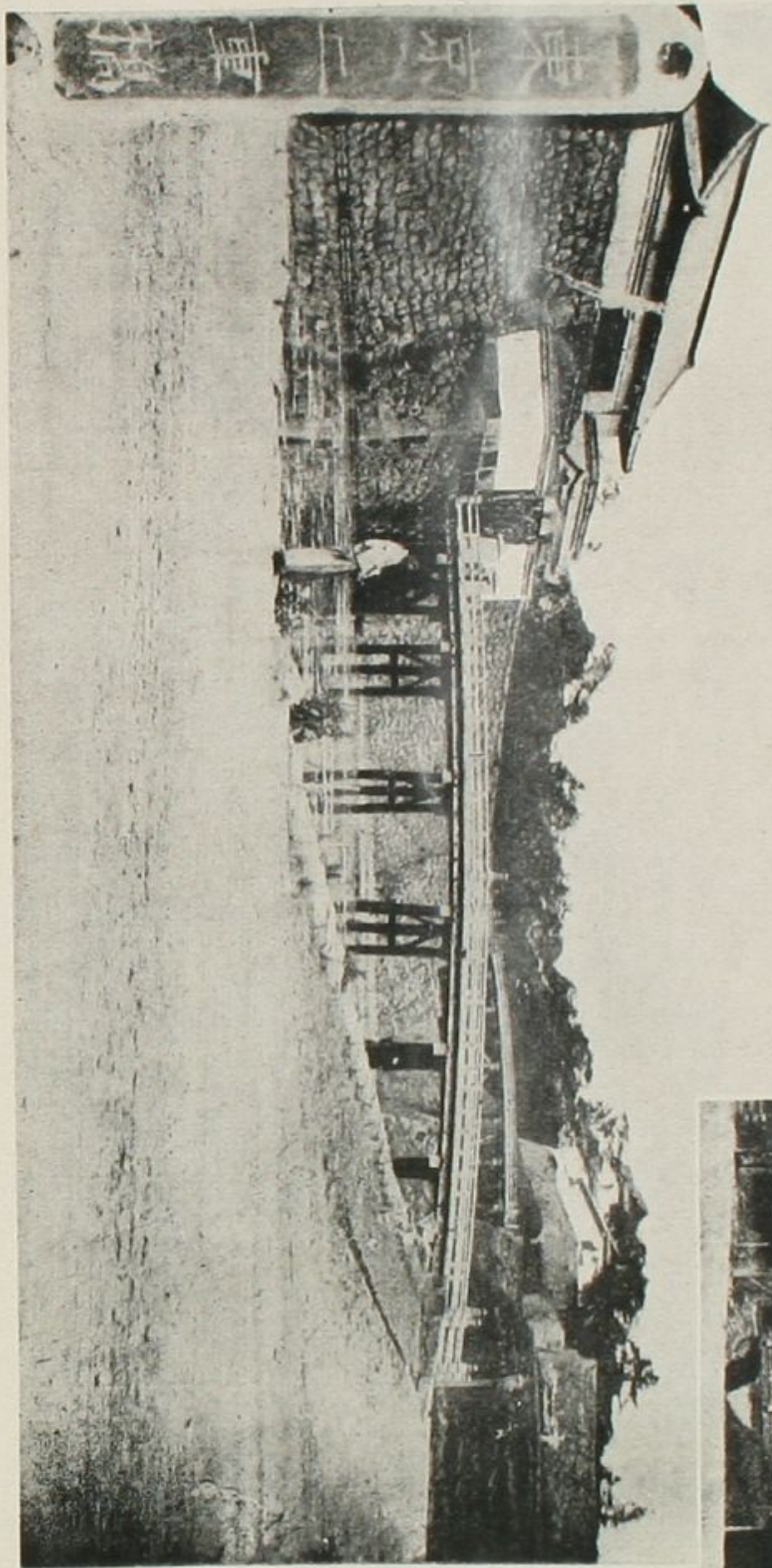
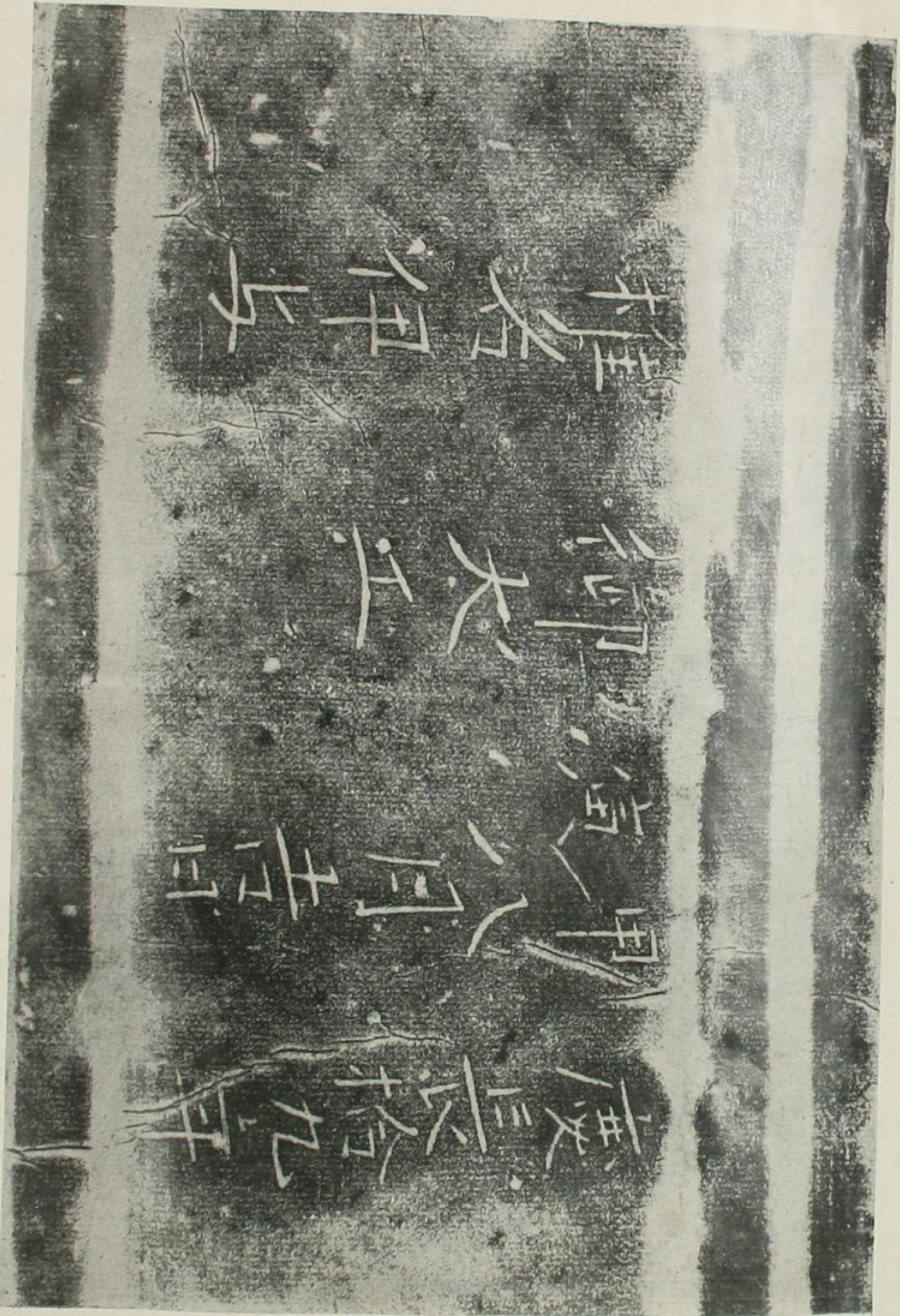
一通







九



東京二車橋



以上二枚陳列令飾るに尾飾并横巻を賜ふ  
りともあらう、明治元年、聖上御入城高野の所  
謂ニ重橋の光景あり、橋ハニツあるありとも  
ニ重橋の称あるも今の橋の位互とハ同か  
ずとハ擬寶珠ニ慶長十九年の刻字  
ありたるをいりしか其のよも他、移さるる  
元平河橋ニ存するより、尾飾并の法也

○此年六月二十日より、任事を開始し、尾飾并  
追記念事業演劇場物建設主のついでに、資本金  
募集、本年六月二十日を以つて満一年を終つ  
し、募集額十七萬五千圓に達し、工費七半ハ



ま進めたるに於て、廿三日、芳記、人をむらさ  
余も、任事し、就て、諸般の報告をとり、資  
金の、監査の二十五萬圓に達せり、何ゆへ  
余、丁所と柱ける土地、家屋を、此事業に、寄附  
するの申出あり、他日、是れを、高合、すえの、監査  
額を、優に、超えんと、告げ、報告後、一、提  
議とす、是れ、人の、諒解を、求め、る、是れ、工  
事、竣工前、に、及、理、一切を、早大に、托、す、し、と、不  
議、す、此の、任、事、を、遂、行、す、る、に、早大の、手、が  
及、び、す、る、方、第、一、端、便、利、あり、早知、早大に、移  
す、よ、め、つ、き、早大、工、事、中、福、す、を、可、と、す、と  
云、ふ、又、存、り、早大、第、一、号、七、折、合、海、の、り、す、と



坪内博士記念事業概要報告

(昭和三年六月廿日現在)

一、浸表、昭和二年六月十日 (爾後寄附金募集着手)

一、寄附金募集成績

申込口数 一、四六〇口  
 申込金額 一七五、五〇六<sup>円</sup>六四

一、收 支

拂込金額 一〇四、三三五<sup>円</sup>八六  
 支拂金額 四八、五四九、九〇  
 内募集費 八、八八一、<sup>円</sup>  
 雜費 一、六九九、<sup>円</sup>

建築費支拂額 三七、九六九<sup>円</sup>  
 差引現在手許在高 五九、七七五、九六

經費豫算 (参考案)

(一) 建物建築費 (上遠但請員既定額) 一二一、一〇九  
 (二) 暖房電燈工事費 (豫想額) 一五、〇〇〇  
 (三) 什器其他 (豫想額) 五〇、〇〇〇  
 (四) 募集費 (一部支拂済) 一三、〇〇〇  
 (五) 雜費 (一部支拂済) 三、〇〇〇  
 合計 二〇二、一〇九







高田侯もさう若狭に異議をもちたがるのあらうが  
異議をもち決定す、實に此の事業の完成は  
ハキハキ高田の金融をつくる必要あり、さう  
北提議をもちたがる也

○早稲田の記念演劇と早稲田の生んだ俳優が早稲田の  
身の年々成つた脚本を演じたこと、深い縁因が  
あつた、早稲田の文藝の開祖が早稲田の生んだ俳優が  
念す事業の資を供する為の演劇を催すといふも  
亦因縁のあつた事だ。自分、此の演劇に大なる関心  
を有するも、戊辰會の信、一没却して、去年の日は  
初めて観望し、その日の印刷の社員、觀之得  
て先づまゝ見る人の信見をもち、其の間、演劇の

ありし日の大隈侯を 都の  
目前に見る如く  
澤田正二郎の熱演

演劇博物館の寄付興行

く感服した、ありし大隈侯の姿  
を再び見るやうな感じがした。  
ただ膝だけがもう少し低いやう  
であつたと思ふだけである。

況をきく比や、さうも、  
ハキハキ、眼の光、樂局の  
澤田正二郎の演劇、  
好む事、此の演劇、  
の好男子さう、大隈侯  
侯を扮し得る、或んば、  
能なる可也、白雲、  
たも、さう、入つた、  
演劇、南、こと、  
大隈侯を演じ、  
を早稲田の、  
の多き、演する、

早大に坪内博士の演劇博物館建設  
のために、同大學生出身の澤田正二  
派が一肌抜いで寄付興行第一日  
は二十三日午後四時から大隈記念  
講堂で行はれた、出し物は同氏の  
得意とし好評を博した「白野舞  
十郎」と中村吉藏氏作「大隈重信」  
が選ばれ、定刻前に満員となり  
、母校のためと、坪内氏のためと  
加ふるに大隈侯を慕ふ涙ぐましい  
澤田氏の意氣に、同じ様な心持ち  
を抱く觀衆の心が一致して胸もつ  
まるやうな緊張さを見せ「大隈重  
信」の幕が今や落とされやうとす  
ると、校歌一都の西北一は誰の口  
からともなく歌はれて劇的シーン  
を見せ、かくて澤田の演ずる姿は  
ありし「大隈侯」の身振り態度が  
生き寫しであり、聲もそれに似て  
侯をしのぶ人々に非常な賞讃を博  
した、この演技をじつと凝視して  
ゐた高田早稲田校長は、語つて語る  
「澤田君の熱心と力と熱心に全は



屋松の座銀  は物買お

# 新劇田澤正二郎一助寄附公演

□公演期間中晴天の日に限り観劇券御所持の方に大隈庭園を開放致します。  
□御随意に大隈老侯遺難當時の遺品も御覧下さい。

六月 廿三日 廿四日 廿五日 廿六日 廿七日  
五日間 毎夕四時半開演  
於早稻田大學大隈大講堂  
(市電ワセダ車庫前下車半丁)

エドモンド・ロスタン原作  
楠山正雄氏譯  
額田六福氏補綴

新劇 十種の内 白野辨十郎 五幕

世界的名作を明治維新前後の事に引きなほしたものですが、階級を超越して老若男女どなたにも必ずお気に召す面白い芝居です。詩も、涙も、笑ひもあり、新劇獨特の劍劇的場面もあり、澤田一座の傑作的演技だと折紙の附いた通し狂言です。

中村吉藏氏新作  
中幕 大隈重信 四場

維新の元勳大隈侯が條約改正を敢行せんとし、爆弾によりて隻脚を失ひ下野に至るの、最も劇的なるシーン。澤田は故侯に扮して其面影を再生せしめます。

観劇料 三圓 前賣切符 演劇博物館設立事務所  
二圓 取扱所 銀座 プレーガイド (電牛込二六〇)  
一圓 取扱所 銀座 (電牛込五〇二)

▼前賣切符御利用下さる▲

御挨拶

坪内博士記念演劇博物館の完成は、たゞに劇界のみならず我國の一般文化の爲にも實に悦ばしいことでございます。就きまして私も右建設資金の一助にもと此際母校大隈大講堂に寄附公演を致すことになりました。私にとつては初舞臺でもあり、恩師の爲でもあります。懸命の努力、眞劍の精進を以て舞臺に立ちます。偏に皆様の御援助御來觀の程を切に、切に希ひ上げます。

昭和三年六月

澤田正二郎

主催 坪内博士記念 演劇博物館設立後援會

□すまいごに室下地堂講が意用の事食御な輕手お□すで利便御か方の履草は又靴がすまりあは備設の足下□



エドモン・ロスマン原作  
楠山正雄 翻譯  
額田六福 補綴

第一 白野辨十郎 五幕

會津藩の京都守護班朱雀隊の隊士白野辨十郎は詩人で學者でしかも素晴らしい劍客だったが、只一つ醜い大きな鼻の爲に女といふ女の愛を知ることができなかった。彼はある日彼の従妹甘露寺家の千種姫から戀の仲次を頼まれた。その戀人は同朱雀隊の新入隊者來栖生馬であつた。千種は才色兼備の美女で、辨十郎もその日まで人知れず深い思ひを寄せてゐたのであるが、自分の醜さを知る彼は、自分の戀を打捨て、愛人千種のために戀の媒介者たることを誓つた。それと聞いた來栖は驚喜した。がしかし彼は優雅なその美貌にも似ず歌の道も文の業も辨へぬ。才女千種の戀の相手としては餘りに無風流な男であつた。來栖は自らそれと思つて低頭した。こゝに不義な戀の聯盟が成つた。來栖の美貌と白野の詩想——白野はその後來栖に代つて千種への文と歌を作る、來栖はその詩文を持つて千種の心を喜ばせた。實に千種は來栖の美貌に白野の心を包んで、來

栖一人の名によつて受けた。己の醜貌を自覺する白野は、燃ゆるやうな千種への情熱を來栖の名によつて傳へることにせめてもの慰めを感じてゐた。それから間もなく朱雀隊は幕軍の長州征伐に加つて遠く周防の國まで出征した。千種の許へは白野の熱情を籠めた來栖の手紙が日夜毎に届いた。千種はもう堪へきれなくなつて、はる／＼來栖に會ひに戰場まで來た。その日來栖は敵軍に斃れて、戀人の腕に抱かれて死んだ。懷ろから出た千種へあつた手紙は血に染まつてゐた。千種はそれを戀人の最後の情の文と懐中深く秘めて泣いた。勿論それが白野の書いたものと知らず苦がない。

それから十五年の月日が流れた。千種は京洛の邊り尼寺金光院に戀を甲ふ尼僧の生活をつづけた。白野は時々この懐かな從妹を慰めに來た。ある日白野は暴漢のために暗討された。死に顔した彼は最後の訣別によるめきながら千種を訪れた。十五年秘めたる戀の涙と詩が、銀杏散る尼寺の秋の夕の月光にむせぶ。

中村吉藏新作

第二 大隈重信 四場

明治廿一年——新開國日本は安政以來三十年の屈辱的條約によつて先進列強の虐げをうけてゐた。條約改正の急務！それは朝野を擧げての輿論となつた。だが之はなかくの難問題である。井上馨は之に着手して散々に手を焼き後始末の付け方に困つた。時の樞密院議長伊藤博文首相黒田清隆も策に窮して早稲田の大隈重信の躍起を求めると外はなくなつた。勿論當時の日本の實力から見て容易な業ではなかつたのである。が、事は國家の急務である。黒田の熱誠と伊藤の懇談に動かされて大隈断然過去の感情を捨て決然立つて外相の椅子に就き、自ら難局の渦中に投じた。

剛膽者大隈の改正案は裁判管轄にも税關通商にも前の井上案と比べて遙かに急進的なものであつた。が幸ひに各國の諒解を得て、殘る處は英國外一二の國に過ぎなくなつた。それでもまだ世界の大勢と國家の實力を解しない國粹黨島居副島海江田等の一派は外人の内地雜居、土地所有及び大審院外人判事採用等の諸點を擧げて無暗に「國辱外交」を叫び、日夜外相邸を襲ふて無量の示威を擧げた。かうして大隈は後へに難案の進捗に對する官界一部の淺情を買ひ前に國粹黨の楚歌を浴び閣僚後藤藤二郎まで來つて頻りに辭職を勧告したが、剛毅熱誠の大隈は斷乎として所信の貫徹に猛進し續けた。遂に來島某の爆彈を受けて片脚を失ふに至つた。

年移つて四十二年——横濱港掃頭山の邊りに井伊大老の銅像除幕式があつた。當時大隈の志を見ざる小公憤の及に斃れた卓見の土開國の祖井伊直弼の銅像に寄する大隈伯の演説は、それ自身、往時の難局を追憶する伯自身の叫びであつた。

横濱港

事とも云へ得らる。保し早稲田のさきへは  
る情もあつた。此の如きもの或るの觀望もあ  
か一言、早大の校歌も高揚することさうだ  
演しといふり得ぬことさうし、六光彦か井伊相傳  
陰幕の演説を今衆拍手喝采する●こ  
とも早稲田に柱をえらうべしともあつた。●こ  
十、鉄鉋と感しなうの侯に似たるこ  
とるんも、他の大体に柱を成印しやうともふも  
得へし、



古香 撫玉印休



二十三年一月

袖堂謹啟



寂然居士

名惟常 號梁園



己丑晚秋篆以呈

淺田大先生并正

袖堂謹啟

心不動



淺田大先生之一

袖堂謹啟

善公相梁園



二十三年第一月

袖堂謹啟













吉澤  
文庫

(女劇) 田原 (里) のその 婦人 斯は子孫 居てい 畫を替小で光日

兄也、

六月廿五日



○次の年々入つれば海軍少将元毛沈次郎柳  
楢原の山蔭菰栗といふ隠居者と一後、此れ者  
ハ海産料理の定歴法ハ食單者である。この  
人料理の隠居の通人ハあり、此れことハこの  
段に就て種々実験法もあるが、左の一紙を  
余の百道集の内は、恰今の材料也

あつて元保の頃、殿の用人ハ湯浅集と  
いふ殿付きの人の御うけり、東海道の旅  
の廻り庖丁、釜、焼火鉢、木炭、醬油  
と合羽、靴、入ん着、襦袢、袴、  
と買得て、自ら調理し、合ひ侍り、  
と、おのゝ十四五の項目表あり、成りたる

世の

段のといひけり、あつて人といひ、えやや、其頃  
用人といひ、けり、供二十人、御り七、雲の櫓、  
引馬車と、ごやうく、き供、連、ま、あつて  
まの身、柄、あつて、人のあつて、か、店、了、と、ま  
といひ、あ、こと、い、ま、あ、つて、人、といひ、あ、つて、今、世、の  
中、ひ、ら、け、れ、何、も、ま、よ、ま、う、ら、う、き、の、海、産、  
れ、と、あ、わ、し、い、さ、う、あ、つて、ま、あ、つて、浮  
崎、の、原、見付天、龍、の、枝、川、新  
橋、名、依、屋、堀、堀、ち、と、う、ら、う、き、の、名、所  
ま、ん、と、焼、き、ま、あ、つて、口、ま、あ、つて、  
ま、ん、と、あ、つて、

○あつて、前、報、知、社、が、廿、の、前、の、世、俗、長、短



今日出る結うしうを尋ねて成り上る物  
巻軒と扱ひ午の樂の樂を多けり廿の  
河の入坊者七萬三子といふ平均一日三千五千人  
入坊彦根屋分の海列をんれ日の方千人の入  
坊者ありしといふ収入一人五千銀といふ三萬  
五六十圓の收穫ありし也多くの長年  
かりたんが差引お南の利益もあつた  
心。當日未合の雨の梨を名中家合三雲故  
一留未合年のお多。志方より余の挨拶かありれ  
る故自ら中前の客にお扱きと受けし陸の礼と  
と述べた高の楽見北人の尾崎お美の友人とい  
いつたや新年の紅まを飾るを北人と云ふ人

徳川

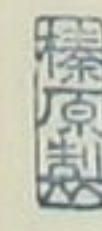
勝手は酒を飲めお美を困めお美の口説に  
年の悪客と考へんれ女人の即ち北人といふ  
五ひに一夫といふ。此のゆゑ後報知の大隈社  
中より一問来る。技見えんか今の徳義梨  
本守守正殿むも福収奉入の和杯を賜  
はる方の通達をそあまの下の下りて物とい  
り  
（六月廿六日記）  
の柳樹悦の「山陰為楽」と讀み、一二を左に抄す  
交者道物の項に云く

あかー彦彦太守か品川大井村の別荘殿招  
の給ひしとき、其目録に大鯛一尾ひらぬ  
一尾、細根大根、富士山葵、防風大蛇、西施



舌を交へ盛りたるを土をせよ七枚を給ひ此  
り、こゝ真の生物をみよ生けることし  
たんと鮎のさしみるはり、生皮を上へ西儀の  
鮮塩ありさうさう黒皮を上へて生るか  
いさず、大根をさびハニ二割り見んハ中へ  
おろしこ入あり、鮎の田嶋、西施舌の鮎は  
りも七酢付と志しそさう。此も今の油記する  
よどの危う家阿ささしとおしひぬ、嘉永  
の頃。

鮎のいやさあるも今の料理屋に出さぬよある  
も大昔より公料と一献人のまゝ及びむこと古  
まうさう、鮎の記に云く



延正式神祇の有鮎汁主汁有乾鮎鮎  
鮎に伊若狭丹後油中俣後安藝油  
防後改等物献之とあり、朝廷よ冬  
とせしよのさうさう、其後真氣を忌む  
下等の倉物とさうさう、や、東よ、延正  
部いんをくひけるん夫の左衛門の体立  
考、其のこゝのまを是を包て、や、  
まこゝのこゝの侍りくと笑ひける、式  
部とさうさう

日の本、大やらも、伊若狭、安藝、防後、  
とよむけんの左衛門の取るも、さう、さう



鞠とおおらといふとかや、まことちんちん若  
 兵に執事殿別当さうける侍をぬへ  
 麦米にいんへんせをいへ只今御進す  
 へきさう仰らんけん別当さうせんや  
 此飯菜さうともさきさう思へ取  
 とい御進の時志ろしぬへんさう  
 や下暮さうさう、若殿さうさう  
 ことを言さうさう、妻を家原さう  
 ハ質素をさうさう、酒家めいさうのぬ  
 たりさうはゆさう、とあや、其名残常  
 陸の江戸縁守和崎さうの城まいたし  
 の献上さうさう、さんと大名旗本さうさう。

御進

秋あさこの人、雅新さまの合さう、何りきほき  
 七頭室あさこの用ひささうと洋知志の船油漬  
 こいさうこいさう天皇の御饗さうも供さう  
 こいさうさうめい





○今の銀は散策中ニ茶屋店頭ニ砂時計を  
 又入るを購入の四方ガラス **おも**るは英西和茶也茶  
 碗名の細末の砂入のあり、一時可成りのものあり、英西  
 昔しおもるものあり、今得んとおもるものあり、英西  
 ハ海石ニハ今北のあり保守の四柄味を全し、こ  
 机上ニ置き定ると古物を和す可き、壺を置  
 き酒を飲ぶ時を計る可き、ピアノを置くと  
 き演奏の時を測るものあり、原始的の味あ  
 るおもる言ひ難き魚の味を是なり 六月廿九日  
 ○今なる出段とす、随筆ニ鏡と鏡のことと  
 以て中の一書流るることがある、是ハ海  
 老鏡のこととある、海老鏡ハ支那傳來の鏡



樽造りたるを所従の二條のあり、おもるものあり、其形  
 が海老のふかたどつて、おもるものあり、有職  
 の方而ることを採用して、神祇ニや宮殿を  
 とり用いてみる、せん何れハ海老の形とつた  
 といふ、こゝに二条のものは、味がある、魚の  
 全体眠るもの、解るるもの、鏡の  
 如き、おもるもの、衛の役目とす、おもるもの、終  
 夜眠るもの、魚の形とす、一程の魚の形と  
 である  
 六月廿九日記  
 ○異國畫者のアツベルグの日本紀行の  
 反譯が出版して、取らぬが、翻後中  
 七あるが、一節載つて、おもるものあり、其



か、おれ四年の返済年の茶人

一角紙の角のカンバン(執業の意か)ハ本年ハ  
ハ非常なる高値を以て買入るべし。以前より多量  
の一角紙の角が密輸入され、非常なる利益  
を収めたとおもはれる。日本人ハこの角を不信心  
儀とみかかるとおもはれる。命を永め生活  
力を促し、記憶力を増進せしむる有効な  
信じてゐる。一言いへば用ひえても不  
キ。萬病を治し、凡そこの病に使ふのである。  
こんが和茶商人の交易があるうちに入らん  
のの最良のことに思はれる。保たれる機会か  
らして和茶商人のこんを奨励する。切實をえ

昭和七年

のひある。長崎に住んでおれ、高松長が  
つよとあり、グレラとド産の一角紙の美  
るの角を、親しくしておれ日本のも  
たのひある。この通洋のこんとを  
支儲といた。こんを和茶商人の  
から集めらるる限りの角を集め  
かし、こんを最良の莫大の利益を  
めた。最良の味より一カチエット(一  
ル四分の一)が判百枚即ち六千  
グール(六千リクグールの後  
賣んたのひある。おれ、おれ、おれ、  
り、七十枚のひある。おれ、おれ、  
續いて三十

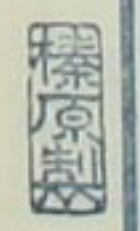






連続と云ふのである。終つて我慢がしきんうきき。  
世界中に一番人が多く又一番お家の人の多い  
国も老きしてしまふといふこと思ふ。保つてい  
ふ執拗ひつ、その好懐心の執懐を善意に  
解得しとやること出来る。

此の頃の著者は意のあつて我回を記述してある。  
此の頃の著述が廣く西洋の流布してゐたら世界  
七早く日本を考へたといふであらう。著者がいふ  
如きを感へたこともあつた。大抵ハ日本  
の好懐を指してゐる。日本が昔から外國の  
腹をえんことをかゝることやら、日本の進んが外國  
と難を構へることをぬきまゝのことやら、四



實際後の國民が、日本人の奴隷を好まふといふ西  
洋も較べれば、其の奴隷に似かひぬといふ。自れ自  
由に存してゐるといふ。子供を言へば、西洋の如  
く打擲するやうなことも無いと褒めたる。九州から江  
戸までの街道の旅程殊に道段の完全、凡光を衰  
へたうして歸る日本と、同傳を言へば、冷然と  
の捏造を指し、早稲人が入つた後の時息を吹き  
かへたうおくびを言へば、其の場、悪を先白して  
ゐる。亦江戸流在中、著者のつて、つて日本の運  
ハ桂川南流と中川流の尾にあつたとある。  
外人の紀行に、概して難いといふ地名の誤記がある  
其頃の人の及譯者が居ることも、宜と云はう、場を







のやうなものが少くある。だが融合して一  
種言ふ可き味を有する。又料理の  
たが及遠くは意義がある。西洋の七支  
那の北地は味が舌と露骨が其味を  
凡くが舌と鮮かであること、事定む  
ふ。随つて日本の較べると原旨の故  
と未だ脱しきいと云ひえやう。或日本  
の料理は目と訴くることを主眼とす  
ること、不後もある。如くも小豆原風の  
料理も他流流より種々の形と  
吟菜や肉を切つてするの、眼を  
主眼とするやうであるが、是れは局部を

元々全般を評する偏見がある。茶人の限  
り味を本位とする所は、形を以て  
決して拘泥しない。凡角外西人の日本の平  
凡のものを味うて直ちに全局を評し以て  
ふ。康南海といふ西洋の料理の程を教  
へて来る程とす。其程を以て五種、  
第一は自國のも七種と教く、其世界  
にも変化のある料理の支那といふけん  
にも此説を以て的り出さるる。日本料  
理を五種程とす。其程といふのは、何れ  
の程であるか、豆腐百珍、鮑百珍、芋百珍、  
海鱈百珍、甘藷百珍、といふ刊本七種



















Handwritten manuscript in cursive style, likely a draft or a specific section of a larger work. The text is dense and fills most of the page.

稿本の「田舎源氏」

尾崎

田舎源氏の稿本寫眞について

尾崎久彌氏がその記述中に引用せられた、種彦の「田舎源氏」の三十九、四十編の稿本は、大正十五年十一月、日比谷圖書館で催された、種彦、月岑、筠庭三人の追遠記念祭に、種彦の曾孫、高屋金之氏が出品せられたことによつて、初めて、その存在を明にしたものである。從來三十八編までだと、一般に信じられて居たものが、こうした機會から世に出たことは、嬉しい事である。詳細は、當時の新聞紙、並に中央公論の山口剛氏の記事を参看せられ度い。因みに「田舎源氏」の三十九、四十編は日本名著全集本に、山口剛氏によつて割剝に附せられた。

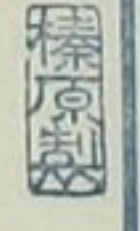
(編輯者記、一四七頁参照)

○評談社から修養書の方を出版するに付、作家  
 二人物も配り、執筆者を請ひてあり、自ら入る  
 頼山陽と頼人、未だ自合、山陽、就て何らあ  
 ることを考へて、敢て、此から再び、これを好  
 まふといふと、方、断つて、強へて頼みから、

日比谷の圖書館に陳列のあ  
 つた時余、就て、これ等  
 の稿本を、今、複製せし  
 め、と思つた。是、打の、一、部  
 である。ことを、今、思ひ起  
 す。圖書館、複製、せよ  
 り、切りぬき、交へ、ね、お、く



にあらざり受けたるは修養の材料として山陽を元極  
つたりの初めであるから一寸筆を元り書ぬれば考  
て見ると山陽の修養期は其の伏櫪動である。彼  
れが脱奔の揚句揃くるとして檻室に三年方出  
閉て入るの彼れは為のうらむるも大切なる修養  
の期であつたに相違ない。彼れが流離の間は艱  
難を死にのち修養のうらむると云いんるのひびる  
彼れは檻室から出る数年一家の互のんに  
唐婦ころうと茶山の康親の塾生に托りて  
たの三十一年の時である。彼れは茶山を托りて  
塾を脱し西京に遊つて、こゝに始めて一家を立  
るの端を脱したか、實に伏櫪動が一生五十三



の半の以上を占めてゐるの、之れを修養の動と見  
ることに出来ぬは十分の時である。と云ふこと  
彼のの下半世の光輝を脱し、たのひのちの修養  
を死に結果ひあること、因りたのが大志である  
とて、無論山陽の修養の大眼を脱し、たのちの  
上山陽の如き前代に物候の多い人を修養の  
標をとするもの、新志であるが山陽を國民的  
の書文藝家と見れば一行のおち、たの標を  
とある。

七月二日誌

○私生をいふ、あきりて外四家の紙切りを  
漁るるの二の家、大空家の書信を創りたる  
このと稿を創りたるよとを、たのひ、たのひ



千ヤールス、デウチンスの古縁を刻したるグラス、  
の英國如きパーバ、カッターを兼ねし、も長人が  
贈心への机案の上を、此文意の古縁あり  
この古縁は、英國のグラス一種の特徴  
ありて、甚だめりや

○北征日誌、戊辰の戦争を終了し、日誌也  
此日誌、戦後新書、田に刊し、其の  
之れを贈ふことあり、難し、或冊を  
ル、ヤ洋から、大橋、吉、花、  
十三冊、余の得たる、冊、余の  
御四の世川家、田、此家の大、  
戊辰戦後の史料として、珍とすべし



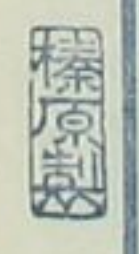
○及人の旅久寛、本身古縁の、  
の年、余の、  
為さん、余と、  
々、余一、  
食を主と、  
浮山と、  
能、  
の、  
可、  
靈、  
え、  
投、







附する以て方法をきかぬらん其資産の泊候  
るものよあつらんゆゑ元格ハ有し其の  
とる此別荘の本屋もも宮中より大きき今又  
者所と出向を建築中より此等の土地價も  
高きこと其の價は建築をも合せし十景の  
日七相あるべき歟此家屋の方息の代  
念として長く保護を要す其校関係の  
人をして静かに若くはまゐるもの爰に市  
聲を聞かぬべし可るべし此處の  
遠くあつても別荘もあつても一人住居のよ  
ハ其の便利なり或は少敷者の合念を  
近きし之を利用し七息を思ふの力



法いづれにせよし其れを遺存中(家)  
二学校へ寄附の手續をなすこと其の  
也然らば其の法も其の法も其の法も  
をその校へ交付せん可也(七月廿日)  
〇並類と乾燥する法は日光に曝すか従来  
の法よりかは直に電氣を以て乾燥するの法  
工夫せんや其法極めて簡単なり其密閉の  
箱に一粒の土を置き其上に魚類を載  
せ其電氣を以て乾燥する其法も其の法も  
此土の吾が秋後の某所にあるものも其分  
を吸収するの特質を有し其魚類の水分  
は容易に吸い去るなり其法も其の法も



也、日光に曝らす法は雨天に成り難く亦夜中  
も成り難し、且つ日光乾燥は炭墨などの  
如くも炭をえんの高平なる吊りし空中  
を廻ると如く丁宜なり、ちよとある日特別なる  
勢あり、店頭路傍なる日乾かすところ、塵埃  
埃ハイ、甘味を侵す危険あり、清浄  
味を缺く欠陥もあるが、此新法は、その旨  
を多く味も亦可也、土の名は、念安し、あり  
此の記録よし

(七月五日記)

○友人林君村の親戚は牛乳を扱ふ事、よき  
り或る夏牛乳を減して、而も剩るの  
勿体なり、と牛乳風呂を淋かし、此走



か人を扱へる事と托し、来る日、其の録を  
よけ、よき、よき、林の友人三村清三郎の細長  
の牛乳風呂は、懐かしく、婦人の氣味、  
しと思ひ、いささか、悪意、関係から、却退も  
成らぬ、出さうけて、入浴する、と、又困る  
たりの、其家の主人が、あつた、火を、林火を、  
ことごとく、時々、風呂屋の、加減を、同じ、  
し、たうと、其表紙、紙、あつた、  
打也、林も、其表紙、紙、あつた、  
笑話、し、たうと、  
田上記

○前項に録し、魚乾乾燥、用ひ、土の、  
の、名、地、帯、し、と、出、つ、  
アドワロ



といふ意味を帯びたるもあらず、あつた交せよある  
か雷後城の遺氣を去るも既に用えらるる  
と前項電氣を道と稱したるは誤り也  
道氣を動かす為り、電氣は物ありといふ  
の誤記也

○三蔵の年に入つた。北征日徳(八冊)を一文道讀  
美成辰の元年、今藩の前衛として古くは王  
師と抗したる敵軍の友軍記録也。嘉永初  
王徳督として壬生(西園寺)之の往く山  
孫軍回陸兵を統へ山田(野義)海軍に備へ、  
薩長、雲山、加賀、高松、高田、石橋、山根、代  
大垣、福島の連合軍。各比、嘉永、賊軍、善く

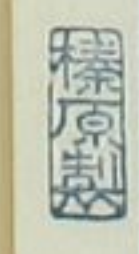
徳川氏

敵ひあつた。嘉永、老し、敵地、後、の、ま、土、に、及、ぶ  
此の志ハ、根柢、各藩、支持の、氣、也、今、日、より  
元人の、皆、ハ、セリ、合、り、を、敵、死、者、七、云、こ、少、す、敵  
軍、大、局、也、得、て、知、り、可、く、断、行、の、報、を、と  
集、め、た、る、もの、多、す、也、城、後、敵、軍、の、大、切、な、る、  
材料、多、く、新、島、田、の、痕、迹、を、打、ち、た、る、こと、也、  
兄、也、河、合、結、之、助、の、名、七、僅、に、一、人、也、  
一、つ、不、見、也、奥、平、海、騎、の、年、侯、と、し、て、新、島、に、入  
り、た、る、こと、也、兄、也、土、の、敵、軍、將、に、列、せ、た、る、地、名  
防、親、し、た、る、ん、の、珠、に、其、味、を、と、る、か、長、官、の、一、藩  
十、数、藩、の、連、合、兵、を、お、さ、す、日、敵、以、徳、川、氏、の、名、也、  
嘉、永、の、奉、仕、を、お、さ、す、徳、川、氏、の、名、也、



とあるらん、又、其の血謀の斧と云はるを得ぬ。此日  
徳太政官日徳回廊の体裁も、官版也申也  
官印用者物方京都額田四三の書なり、係  
り御用版御用掛新島田渡邊美助の刻  
し、  
七月七日記

○早稲田の出版部、國史大系の精約出版を法を  
するの議起、北者の田口邦吉が、東京徳島旅社に於  
て往年出版し、今、全部十七冊各冊千頁に  
満る巨冊也。今、此を縮小し、稀なる為の市價を四  
五上、出版あり、各冊一月位の量價也。敢て其の  
凡例に、増し、其の真面目に、六回史を如め  
歴史系、其の根本書を、徳島に於て、



校合し、北者の鬼曰也。此、徳島旅社に  
出版せらるる也。此、徳島旅社に  
大出版部、再版を約するに、今、此、  
今、大体可決し、全部オラセのト版、  
其の基とする。方、校合の、方、七、  
得し、と、協議し、今、徳島旅社出版し、  
信用を、得し、今、徳島旅社出版し、  
標とす、可とせん  
七月七日記

○楠瀬日年、十二カ法の著を上版せん、余の  
する、其、印、五十三、題の、題、目、と、文、を、  
数、の、其、の、原、稿、を、也、今、の、其、の、原、稿、を、也、



こし来たつを宛た各印面の上頭、鈕の圓を  
リ、家形印邊とす。是即ち昔々  
受けて装釘家、花は、尚日年三顆の  
印刻を流し、政文は、州、不正、外、同  
防印、天行作間人、皆、此の春城  
華流の扉、（七月八日）  
○坊内道、古稀の記念、事業演劇、飾物  
彼のめの上様式を、まむ、運人、比、  
ハ早大維持、人、此の飾物、彼が、後、成、  
先、ち、号、扱、（字、附、し、て、号、宛、端、を、字、  
校、初、す、の、件、七、可、決、（ん、と、前、の、日、録、  
の、主、人、今、余、が、提、議、し、是、に、（の、陳、辭、



を得、了、上、の、す、ま、し、漸、や、余、の、双、肩、の、巾、着、  
と、却、し、以、感、か、ある。此、可、業、ふ、る、と、花、七、嘉、  
ま、一、年、と、安、し、前、余、金、馬、其、他、（つ、ま、  
或、多、面、倒、り、滑、か、移、受、の、手、徳、と、  
何、字、の、件、を、（る、ち、道、の、た、る、出、版、  
部、に、於、て、経、管、を、（あ、す、し、河、西、全、集、四、十、  
冊、發、售、す、（一、す、し、日、に、前、の、年、を、（く、あ、未、を、  
五、の、も、別、産、徒、未、考、の、し、形、式、と、價、格、の、  
傳、り、（多、く、考、え、ん、見、込、ま、は、一、冊、の、價、五、  
十、五、割、し、二、冊、を、（括、し、て、二十、ヶ月、（を、賣、り、  
二、千、部、出、る、か、出、ぬ、か、受、来、る、ま、（見、込、り、  
實、ハ、河、西、全、集、の、似、き、の、こ、の、（な、あ、ら、ず、亦、







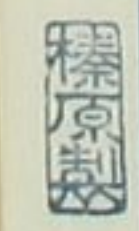




書名を命に記すの七八分は昨年家蔵の改定  
のたゞ半分の餘り假名を構へに折の執事  
に係りから、私とて其後其の紀念とし  
たといふ事あり

○余は書家の海にまゝとて且く玩りたる桐箱と  
訪客の注意を惹き特と関説を傳ふ事あり本  
中より桐と云ふといふものを定めて其の人七  
リ、其の枝反の市村恭輔七八点の六を採り未  
つと終る此人多く其の京師に於て扱ひ  
くばく其の甚く味あり、其の終るそのまの比の  
架上に置るべき事あり目如左

こま犬 木彫 可なり時代あり



木彫魚 こま可なり時代あり

佛像 木彫 一の地盤の一の至金起書也

牙の牛 根付

土彫小仏 一 此は比類一軸子

此は比類一軸子の  
よきもの時代あり

木の實人形 二 櫃の實をす裁し人形を

此は比類一軸子の  
よきもの時代あり

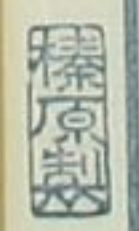
小形桐を収りて頃改に小形元湯、木束加のりとの二  
十数枚今に拾めて小形のありありなるを金と容  
この様に置きあり

○先頃報に於ては世傳志改定を記し日記

(七月九日記)



彼の演説は、日本の演説をよぶた、其中に佛の  
 大使ド・ビーサーの演説をやつた、其の事、  
 25年と、大使も浮世繪の事、(演説の事)  
 へてあることか、あつた、大使の演説中、日本の  
 浮世繪が佛の演説に大感化を及ぼした  
 ことか、演説の事、左の如きものか、あつた  
 事である。



## 浮世繪とフランス

佛國大使 ド・ビーサー閣下講演

田島 清氏通譯

報知新聞社の御依頼に依りまして、只今、フランス大使  
 ド・ビーサー閣下の御話なされました事を、もう少し敷衍致し  
 まして茲にお話し申し上げます。大使閣下は今日少しお急  
 ぎの用がございますので、充分お話も出来ず、何の御参考  
 になる程の事を申し上げる事が出来ず、寔に残念な事でご  
 ざいます。私が先刻閣下のお話より聞き取りました事に依  
 りましてお話し申し上げます。先づ私がこゝに僭越ながらフ  
 ランス大使となつた積りでお話致します。皆様もそのお積  
 りでお聞き願ひ度うございます。

錦繪の西漸

私は専門家ではありませんから、浮世繪其ものに就ては  
 お話し致しません。浮世繪といふ言葉は今日では、何處に  
 参りましても多少なりとも美術の觀念のある人に知られて  
 居る言葉であります。どうして其言葉が、世界至る處によ  
 く知られて居りますか、殊に我フランスに最もよく知られ  
 て居りますか、といふ事に付てお話し申し上げたいと思ひま  
 す。昔から美術が世界の國々に廣がつた歴史を顧みますと  
 日本の浮世繪の様に東洋から西洋の端迄、はる／＼海を越  
 へて向ふの國に渡り、さうして何れも其の國の藝術に大變  
 な影響を及ぼし、非常な感化を與へた事がわかります。日  
 本の花の種を持つて來て、それが向ふで成長して花が咲き  
 ましたといふやうな具合に影響を及ぼしたといふ事は、誠



に不思議な事と思ふのであります。勿論浮世繪はアメリカの方にも参りましたけれども、アメリカでは殆ど影響といふ程の影響も及ぼした事はありませんでした。隅田川のほとりに花咲き出でた浮世繪が、フランスに渡りまして多大な影響を及ぼしたといふ事が如何にも不思議な事と思はれるのでございます。そう申しましたも私は此浮世繪美術といふものがフランスにどれ程影響を及ぼしたかといふ事をお話するのではありません。それがどういふ風にしてヨーロッパ各國殊にフランスによく知られたか、よく研究され又鑑賞されたかといふ點に就て只今お話ししたいと思いますのであります。

開國と同時に注意を惹いたものは？

—— 錦 繪 ——

諸此の浮世繪美術がフランスに傳來したのは、フランスの國と政府とかが關係したといふわけではございません。さうでなくて全然個人の手で個人の研究に依つてフランスに傳はつたのでございます。ずつと昔にさかのほり

ますと、日本が鎖國主義を採つて居りました爲めに、十七八世紀、徳川時代の日本の美術は少しも歐米各國に知られて居らなかつたのでございます。殊に版畫が日本の美術の中に含まれて居るといふ事は全然知らなかつたのであります。それが段々日本の國が鎖國主義を捨てまして、歐米各國と交り結ぶといふ事になりまして、初めて日本の美術が歐米各國に知られたのでございます。開國と同時に歐米各國人の注意を最も惹いたものは何であるかといふとそれは錦繪でございました。御承知の錦繪が非常に注意を惹いたのであります。當時フランスにはボン商會といふ商店がありまして、之が日本に代表者を出しまして日本の美術品をドシ／＼フランスに輸入したのであります。又同時に日本からも林某といふ者をヨーロッパに出しまして、フランスのバリーを中心として、イギリス、ドイツ等の國に盛に日本の美術品を送り出したのであります。之等も皆商人として自分の仕事をした丈の事でございます。何も政府の依頼を受けて居つた譯ではありません。只今でもバリーにボンマルセといふ大きな商店がございますが、恰度銀座の松坂屋とでも云ふやうな商店であります。此のボンマルセ

バルビゾン派とアカデミー派

といふ商店がございまして、先刻申しましたボン商會の日本に來てゐる代表者がボンマルセ商店の日本品仕入を引受けまして、日本の美術品を、即ち絹織物とか或は茶器とか置物とか陶器類、さういふ様な色々な美術品をどし／＼フランスに輸入したのであります。そこでこちらから送りまする箱詰の荷物がバリーに着きますと、日本の美術品を愛好する人々が集つて荷物を開いて日本の美術品を見て感嘆したものでございまして、中には夫等の品物を盛に買集めたといふ熱心な者もございました。當時もやはり刀の鐔などが随分集められたのであります。其他掛物等も珍らしいものと考へられて非常に愛好され、版畫の方でも北齊とか廣重とか、斯ういふ繪が澤山参りました。當時のヨーロッパでは浮世繪といふものは北齊、廣重のみが諸くと考へて居つたものでございまして、斯ういふ風にしまして段々向ふの人々が浮世繪を知る事になりましたが、それに依つて向ふの人はどういふ事を知り得たかといふと、寧ろ日本の風俗を髣髴させたのであります。斯ふ申しますと如何にも道楽半分の仕事の様に考へられますが、然し乍ら之を以て決して道楽と考へる事は出来ないであります。

何故かと申しますと、日本の浮世繪美術はフランスの美術に大變な感化を及ぼし影響を與へたからであります。と申しますのは恰度其時分のフランスの美術は新生面を開拓しなければならぬ時期に直而して居つたからであります。其處で當時のフランスの繪畫の状態を簡單に申し上げる必要がございますが、フランスではナポレオン三世の終り頃から、ローマンチック派が、殊にバルビゾン派が衰へまして、其反動として非常にアカデミックな、古典的な形に據つた方に立返へつて居つたのであります。主觀的な方面に向つて居つたのでございます。それで其代表者と致しまして、アングルといふ人がありまして、盛にローマン派の繪の描き方の不味い事、ただに輪廓描寫に重きをおいて色彩の方を輕んずるといふ事を盛に批評して攻撃して居つたのであります。處が其弟子の時代になりました。矢張り輪廓描寫に重きをおいて、色彩的には餘り意を用ひないといふ傾向にあつたのでございます。それで當時の青年達に大

浮世繪の海を渡るに、其の中心は



變人氣を失つて居つたのであります。何故かと云ひますと其時代の青年達に云はせますと、繪といふものが餘り冷たくて不可ない、もつと繪に生氣を含んで貰ひたい、動的であつて欲しいといふ事を盛に申しました。でフランスの美術はいくらか動的の方面に打向ふといふ機運になつたのであります。其處へ日本の浮世繪が入りました。そして之が如何にも動的である、生々しさがあつた、爲めに向ふの青年達の熱望して居るものにしつくり合つたのであります。其處で浮世繪美術はフランスで白熱的歓迎を受けまして、多大の感化を與へる事になつたのであります。當時の青年達の思想を考へて見ますと、恰度其頃は進化論の全盛期に當りまして、スペンサー、ダーウ井ン、斯ういふ人の進化論の方面から見ましても、日本の動的な畫風は恰度よく進化論の觀念に合つたものだ、と認められて居つたのであります。さういふ場合でありましたから、浮世繪が歓迎されたのも當然の事でございます。

### 浮世繪の蒐集家

浮世の移り變つて行く有様を思はせるもので、誠に動的な世界を描出して居るものであります。さういふ點から考へますと、其當時の幼稚な寫眞術に比べて見ますと、まるで日本の浮世繪は活動寫眞でもあるかの様な感じをフランス人に與へたのであります。さういふ風にフランスの繪に多大な影響を與へたのであります。

### ゴンクール兄弟

尙一つの影響は日本の版畫の研究から、段々ヨーロッパの他の國々の版畫の研究といふ事が初つたのであります。其中でも最も著しいのはスペインのゴヤの版畫の研究であります。それ迄にフランスに影響を及ぼした浮世繪であります。併し乍らさうかと申しまして此研究は凡て之迄は個々別々の研究でありました。其間には何等の統一も連絡もなく、少しも纏つて居らなかつたのであります。此研究をまとめましたのはフランスの有名な文學者のゴンクール兄弟であります。ゴンクールは浮世繪美術に付てはそれ程完全な智識を持つて居つた譯ではありませんが、物事に熱

浮世繪の蒐集家とその研究

其處でそれからどういふ風な人が日本の美術品をよく集めたかと申しますと、それは勿論美術家批評家が多い。ドガ、クロード・モネ、クレマンソー、それから音楽の批評家としてはビゼー——カルメンの作曲者。その他随分澤山あつたのであります。今一々覚えて居りませんが、申しません、斯ういふ様な具合にして日本の浮世繪は段々向ふに知られて参りました。其結果としてどういふ事が現はれたかと申しますと、フランスでは繪の方に於きましては印象派が生れたのでございます。印象派と申しますと寫實派に相當するのであります。音楽の方ではワグネル風に相當するものであります。日本の研究に最も熱心であつた人は斯の有名なゾラ、それからベルギー人でありましたが、ブレイクワール、之はフランスで一生を終つた人で、なか／＼熱心家でありまして、北齊の繪を見まして其勢ひのある事に大變感服して日本の世相を如何にも良く現はして居るといふ點に敬服し、其論文を書き批評を試み、アカデミー派のカバネルといふ人と盛に論争して、日本の浮世繪の爲めに氣焔を上げたものださうでございます。浮世繪といふ言葉は、只其の言葉を聞きますばかりでも如何にも良く

心な人でありましたから、當時ヨーロッパ殊にフランスに滞在して居つた日本の人々に付て色々學び、浮世繪なるものを見てどういふ印象を受けるものであるかを知り、其印象を人に知らしめる丈の著述を編みました。其著述はフランスでは餘程重要視されたものであります。其著述に付て見ますと、浮世繪といふものは、どんなものであるかと申しますと、瞬間的な印象をうまく描き表したものである。それから先づ滑稽な風俗畫であつて、大體東洋のボンチ繪とでも云ふ様なものであり、人間生活を解釋する上に如何にも手際よく其生活の特長を捉へて書き表はしたものである。さういふ様な具合にゴンクールの著書では大體認めて居つたのでございます。誠に版畫の特徴と申しますと時代風俗の特徴を誇大に書きまして餘計な事は全然つけ加へない點であらうと思ふのであります。

### 浮世繪の影響

それから其ゴンクールの時代には、どういふ版畫が珍重されたかと申しますと、北尾政美のものに人氣があまりまし



た。そうしてそう云ふものよりフランスの畫家達は日本の畫風を學んだのであります。それを以てフランスの社會相を書き表はさうと勉めたのであります。恰度東京の淺草とでも云ふ様なパリーのモンマルトルの通りにガレットといふ有名な踊り場があります。其處の中の光景を當時の人が描き表はしたのを見ますと、恰度日本の吉原の遊廓ソツクリの繪に描いたものもあるのであります。さうして又其他にガレットといふのは恰度日本の寄せみたいなものであります。さういふ處へ出入りする畫家も日本の浮世繪を眞似て色々な繪を書いたものでございます。段々擴がつて参りました。廣告ビラ等にも浮世繪の畫風を眞似るといふ具合で、盛に日本の美術が應用されたのであります。其方面に特に應用されましたものは、或は國貞或は豊國といふ様な人達の繪であります。又日本の美術品を集めた人の方を申しますと、段々さういふ方面の人も多くなつて、智識は進み、趣味は洗練され、注意も深く専門的になつて、遂には落葉の研究から鑑定法迄明らかになつたといふ様に進んで來たのでございます。就中最も日本の美術の研究に熱心であつて深く其方面の研究を積んだ人は、之もやつぱりバ

リーで一生を終つたイタリーのチエルネスク、それからリオン染物屋でギメーといふ人でありました。之れは長い間日本に滞在して、日本の美術品を澤山集めて持つて歸つた人でありました。版畫の方では寶玉商のヴェヴェール、之れは最も良いものを澤山集めた人でありましたが、先年日本の松方幸次郎氏が買戻したといふ事で、良く知られて居ります。それから又美術史の研究家であつて日本藝術史といふ著述を現はしたロルフスでございます。是等の人は皆同じ時代の人であります。すつと下つて此頃になりますと、パリーの裝飾美術課長をして居りますケクラン、此人はなか／＼熱心な研究家でありまして、浮世繪版畫研究といふ著述を出したのでございます。其著述の中には版畫の寫眞版を澤山集めまして、浮世繪の始つた頃から徳川時代の終り頃迄の浮世繪の事を詳しく研究したものを發表したものでなか／＼有名な研究であります。

### 日本美術の鑑賞

最後に日本の美術品がフランスで、どういふ様な具合に

目下鑑賞されて居るかといふ事を申しますと、今から廿八年前にパリーに出來た日本美術クラブといふ會があります。其會員は何れも日本美術の愛好者で、蒐集家であります。之等の人は月に必ず一回づゝ會合して銘々の集めた美術品を持合つて互に鑑賞して居るのであります。先刻申しました熱心な古い人はもう此頃では段々亡なつて参りましたから其會に出席する人と申しますと古い人ではクレマンソーであります。クレマンソー翁は今でもやはり殆ど缺か



信 春 木 鈴

さないで會合に出て居ります。私も前には必ず出て居りました。今でも向ふに居りましたら出る心算で居ります。只今では此方に参つて居りますから、今日報知新聞社で催されました此の會合の様を詳しく通信する心算でございます。パリーの會員が面白い事と思ひ定めし喜ぶだらうと思ひます。終りに皆様が御熱心に聞いて下されました事を感謝いたします。之がお話しの大要でございます。甚だお聞きにくかつた事でございませう。(終り)





喜多川歌麿

山姥と金太郎



清長

### 浮世美人くらべ

江戸随一の美人笠森お仙も柳屋お藤も、湯島の巫子も、春信の筆に現はれては、いづれも夢見る如き細ツそりとした美人であつた。春信の繪は超世間的で、頗る詩的で浮世繪の美人畫中に於ける、最も好ましい一つであるが美人の時代相とは頗る縁遠いものである。同じく縁遠いものであつたにしろ、美人畫では清長の美人が最もよい。春潮の美人も其肉附きのよい點では清長に劣らぬが、力強い張り切つた所は遠く清長に及ばない。清長の美人には活氣が旺盛して總てが緊張してゐる。之を歌麿の疲れ切つた美人に比すると、一は剛健なる生命が流露し、一は生活の倦怠が漂つてゐる。春信の美人は精神的なるが嬉しく、清長の美人は

肉感的なるが愛すべきである。同じく肉感的ではあるが清長のは意志的で歌麿のは情的である。

もう一つ見方を違へて見る。春信の美人はどこことなく、うぶで女三の宮の面影がある。清長の美人は肉にも精神にもはちきれさうな氣分を帯びて、恰も紫の上に現はれた八分の春色がある。歌麿の美人は惘然し切つて、寧ろ廢頹的氣分が搖曳してゐる。之れ方に懐胎してゐる花橘の明石ノ上でもあらうか。江戸全盛期の美人は歌麿の繪が之を代表して、色つほいこと限りなしである。

解放 【日本國民性研究號(大正十年四月) 笹川臨風氏  
日本美人觀より】



コシナは俗をとり外と懸みす分こゝに収める  
のい歌座の俗がゆゑ好むも家を懸す  
るもど妖艶があらぬかをとりんとする者あり  
ある山姥にコシナ美人がある程いふの金太郎  
のやうな強烈なる男を頼りコシナを俗  
くする画者の手あつて夜くまもたまひコシナ  
関店を遠かつた給ふたてする注湯氣  
が漲つてゐる。歌座の俗のデカダン  
であることいふ言ふを待たぬ、ひりく肉感  
的であるが清きうゑ緊張した流力かえ  
へる此点の臨風の境は回感する



○先頃の報載の長次郎の事とせよ夫は正徳の多  
くの幕臣が出た。多くは狩野の家の子とまねし  
るものがあるが、何れもある時代と後世と浮世俗  
とよよよの言ふ事かたはあつたかといふが疑問  
ある。屏風の多く大名の事であるから一属  
疑問とする。大名の市井に起つては貴族であ  
る。天正氏等の大名の武の以つて其地位を贏  
得し得たものがあるから、武張つた俗を言ひさう  
するものもある。平民の言ひさうする  
ものを論ずるにそのが多い。實の言は大名七兵衛  
馬又の飽きしといふ、遊女の私室をまじ武張  
つたものを言ふことを好まらるつたてある。品



のよみお歌とくくは能楽もあるが俄に大名も  
見えぬこといふ其のちを面白くも無つたであら  
う。彼等が唯武士時代に興を起して其のち  
お上や祭礼や盛會場を設け彼等を楽しませ  
しむおあつた。今の成金七の扱ひは  
其の書をやつて七どこの品が下の品を笑かぬ  
戦国時代俄に大名の扱味ハ剛柔のあつた  
からいくつ行中七葉をうたふは市井と題  
材を取らざるを得なうつた。あつた。行中  
七斯く別天地をもみかさんか絵画生活と續  
け得るうたはあつた。斯うてると天正頃  
浮世絵の端を笑し七謎七解けるのが

實現



あつた。末に浮世絵の家のいふべき因一に地  
外に説を導くものあり。

大名席の由南まき屋のといふかあること  
風儀の異を珍しく感ずるは勿論の事  
から、そのを題材とする怪作ありと  
云ふ

七月十日誌

○私の拙著の随筆から文章を掲載すること  
教科書編纂者に行いてゐる。先づ京都の  
村出梅吉、女子用の副本を此に際して  
と奥儀の二冊をえり入れた。又その金澤











か敷吉の甲申年の給に於ても免れざるの歎。  
彦根麻呂の浮利の事もあるが、必昭が兄と人  
と心碑をさす。松久の事もある。我々の其の原  
凡の出候やえれ當日一着式午といふ入場ある  
かあるにしろ、いふ事より馬鹿と氣にことひあう  
人を撃撃せよとせよ。

日本に此の如き名意があるのも外人に褒め主と  
いふ程の事と思ふ。ぬのの情けあること  
此友人林義村の川柳に「洋書からやし  
春信の歌麿の」とあるの、よく穿つてみ  
る。外人の評への錯る軌道を通し我流世  
俗の大方を画取ること、丁二七口、比

比

するもの、常より消滅する。 (七月十三日誌)

○楠瀬の年々、喉にたる印、三顆、長友の春  
城、下語の扉に用にとする、ことある也。

改言居

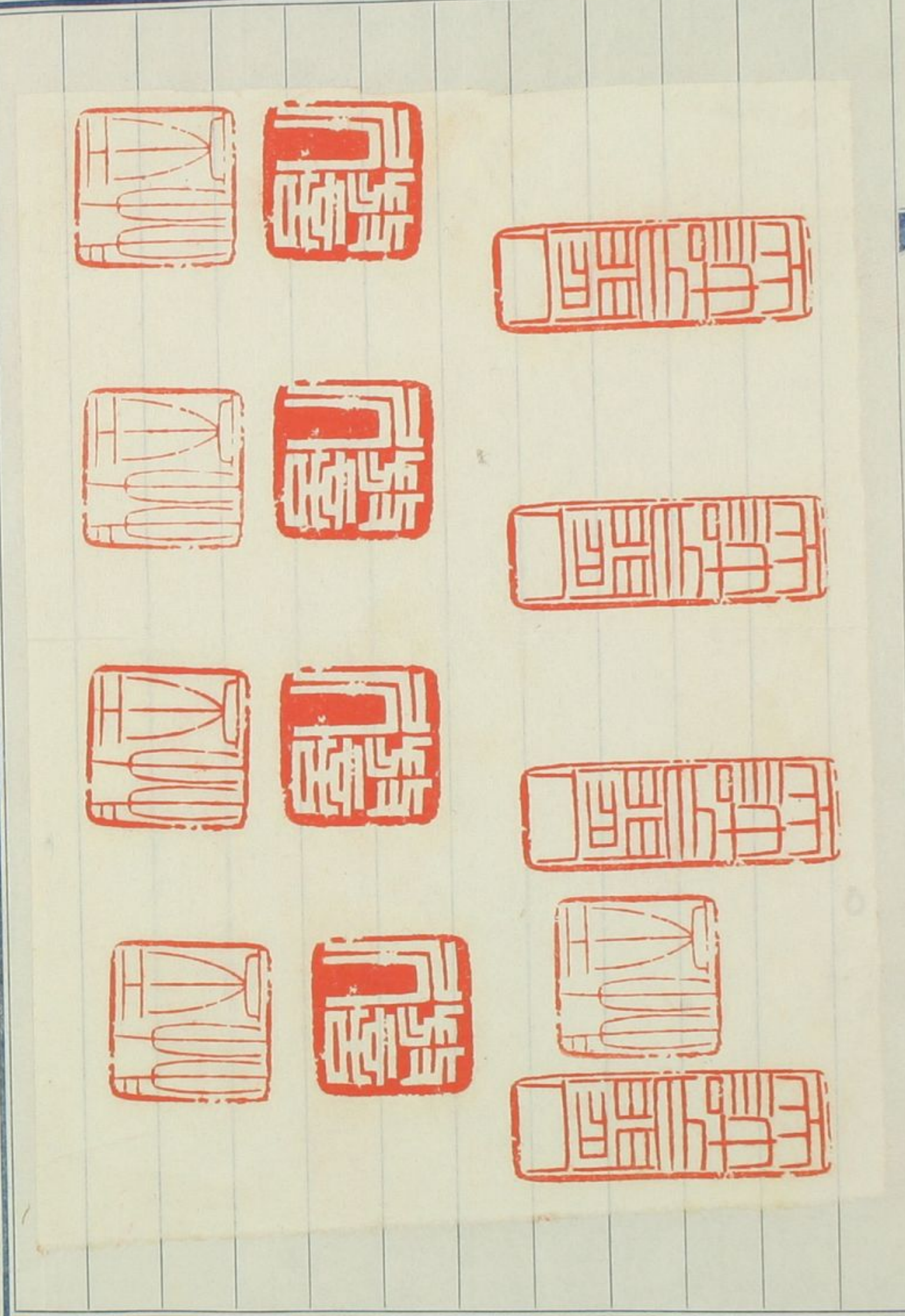
仲と不工



天許心湖人



日前年北東に遊んた時、  
 北京飯店と、  
 公二平と、  
 英金をものを出し、  
 あつた。麦酒のやうな、  
 日本製の麦酒を、  
 四樽と、  
 北京飯店も、  
 が、  
 ビールは、  
 大改の朝の、



北東



大坂の飲まけん、ほうまき、ちの、他、不、打、軍  
ぶと味の、変、する、と、見、く、保、し、北、ロ、ン、林、五、米、未  
利、加、流、ひ、い、る、へ、北、頃、に、利、り、キ、リ、ン、エ、ロ、ス、の  
醸、造、社、か、ら、白、ロ、ン、と、い、ふ、を、多、量、り、出、し、た、と、い  
が、飲、る、五、米、利、加、ロ、ン、と、い、ふ、は、か、く、瓶、七、白、名、も、び  
五、米、利、加、の、と、同、じ、い、い、も、う、一、つ、出、た、の、カ、ス、ケ  
し、い、れ、た、(醸、造、)、し、た、も、の、か、為、く、軽、く、苦、い、也、一、も  
癖、か、る、へ、飲、む、為、の、商、標、が、貼、つ、て、あ、る、飲、む、為  
と、い、ふ、は、か、と、思、ふ、カ、ス、ケ、ト、ト、ま、は、此、よ、め、が、此、方、が  
優、つ、て、あ、る、た、せ、違、々、個、々、に、ロ、ン、の、行、い、ん  
出、し、た、か、一、つ、の、原、因、ハ、味、が、高、上、し、て、ロ、ン、を  
解、不、目、的、に、飲、む、こ、と、が、い、く、ら、か、為、ら、い、た、為

和蘭

め、あ、ら、う、り、日、本、人、の、酒、と、い、ふ、は、解、不、目、的、に、飲、む  
解、の、因、ら、ぬ、ロ、ン、を、排、け、す、る、氣、味、が、田、舎  
日、あ、ら、う、り、ま、ま、く、東、京、で、も、飲、ま、る、酒、飲、に、此  
注、文、が、あ、る、の、を、醸、造、先、生、も、ア、ン、エ、ロ、ン、の、分  
を、多、く、す、る、が、に、じ、を、得、る、と、い、ふ、の、を、あ、る、が  
漸、や、く、味、味、が、高、上、し、た、の、を、近、い、ロ、ン、が、受  
け、ら、れ、る、と、い、ふ、と、思、ふ、ん、だ、  
七月十日の記  
○自、合、の、任、事、一、つ、あ、る、文、の、者、院、が、米、販、に、た、あ  
苦、心、し、た、**森、木、九、三**の、條、に、成、る、山、の、呼、ぶ、名、  
と、い、ふ、者、の、日、あ、ら、う、り、の、登、山、物、に、世、に、出、す、こ、と、が、出  
来、今、日、の、ま、ん、と、手、ま、ま、り、と、**森、木、の、相、の、記**  
者、の、登、山、家、と、い、ふ、者、と、同、じ、の、名、解、不、目、的、に、飲、む、の、あ、る



人の外四の高山を登攀し、秩父宮殿下の臨  
行して日を「カラス」を改海し、此方、大本の世  
畏の高山の字を「坂」が六の枚収めである。此方  
休遊の具として「杖」の松高の「ま」がある。自合  
七少壯登山の癖があるが、今の「喰」は「道」の  
者、依つて山を「味」うよう外、まを「先」い  
あかし、道取の者を「見」ると、汗を流して登山  
に「攀」らうと「却」つて「負」がある。此の「若」者も「結  
實」に引てゐるが、「ん」マン「コ」リ、「ハ」松が「自合  
と同一やうなことを言ふてゐる。

登山家の生涯を「道」して「最」も「苦」むる「子  
時」の山の巨人と「却」つて「我」を「挑」むてゐる



時、いさゝか、空をうらむの悪氣、其詞を「終  
へ」す心この「事」件か「過」き去つた後、再  
び「キ」ヤム「プ」ア「イ」ヤを「圍」んで「静」かに  
回想に「耽」る時がある、と信する、

此の「事」出「國」漢の「世」界の「女」ある「巨」嶽を「収  
め、美」の「砂」河、「永」久、「駢」けやくぬ「雪」を「以」つて  
埋つてゐる、即ち此山漢の「又」一面「雪」漢びもあ  
る、山を「不」思「儀」の「怪」物と云へ「得」べくんば、此者  
ハ「扶」物「保」びもある。一枚く「傑」めんと見れば、山  
の「容」皆「異」るんども、萬「解」の「涼」味の「紙」中  
に「躍」り出づ、雪に「柔」を「生」するの「思」があ  
る。各「面」の「群」嶽が「打」穿つて「何」か「さ」い「て」ゐるかの



如き感也す。此譜に對しては人間の眇小も亦  
且つ此の感の起るに禁し得ぬ(七月十  
四日記)

○日本に山嶽登攀家の祖は僧であること、終はるい  
高山の絶頂に必しも奥の院と唱くを佛が置かんと  
あつたが証拠とす。多分真言宗が流つて来たから  
の事である、僧に云つて登攀家のふさへいふこと  
があの山に云ふより大自然に接觸すること、於て亦  
困難と附つて臆を録す事、於て僧の修養  
ハ此上更に云ふもあつたる相違なき、併しいつく  
藤の人間が呼吸の出来る所をいふか行けるか  
本の山に云ふといふも不二山位に云ふれば其の絶

山嶽

頂の如き山に空気が稀薄を感ずること、  
エヴエレストやマッターホルンに於ては其の  
高山に於ては三萬尺に上るも亦かゝる空気が  
稀薄なる事、酸素を携帶して行かぬ事  
ハ、飛行機の如き機械に乗つていふも此の設備  
が要する事ある。酸素が人間の生息に必要  
であること、酸素を感ずることを知らざる  
ル時代、於ては山の絶頂に出来得るもの、  
譯してある。近年、前人の道を仰いで得るもの  
は山嶽の道に征服するもの、其の七二要するもの  
文化の力といふもの無し。  
(七月十五日記)



東

- 同 前頭 花下遊宴圖屏風 (原邦造氏藏)
- 同 大關 高尾觀楓圖屏風 (福岡家藏)
- 同 關脇 本多平八郎姿繪 (徳川家藏)
- 同 小結 歌舞伎圖屏風 (原富太郎氏藏)
- 同 前頭 四條河原圖屏風 (岩崎家藏)
- 同 湯女之圖 (團氏藏)
- 同 南蠻繪屏風 (河本氏藏)
- 同 高尾薄雲圖 (本山氏藏)
- 同 前頭 政信小倉山莊圖 (東京帝室博物館藏)
- 同 春章五美人之圖 (東京帝室博物館藏)
- 同 清長水樓遊宴圖 (桑原氏藏)
- 同 長春腰かけたる美人圖 (九鬼氏藏)
- 同 清信後面圖 (桑原氏藏)
- 同 元秀洛中洛外之圖 (尾高氏藏)
- 同 橋上若衆之圖 (武内氏藏)
- 同 文調笠森稻荷圖 (桑原氏藏)
- 同 豐廣納涼之圖 (松木氏藏)
- 同 榮之觀櫻美人圖 (三宅氏藏)

蒙御免

行 國寶調馬圖屏風 (醍醐寺藏)  
 司 御物南蠻繪屏風  
 國寶職人盡屏風 (喜多院藏)

西

- 同 前頭 歌舞伎草子繪卷 (徳川家藏)
- 同 大關 婦女遊樂圖屏風 (松浦家藏)
- 同 關脇 春章十一ヶ月 (松浦家藏)
- 同 小結 春秋圖屏風 (下村氏藏)
- 同 前頭 四條河原圖屏風 (堂本氏藏)
- 同 美人繩暖簾圖 (原邦造氏藏)
- 同 南蠻繪屏風 (山村氏藏)
- 同 歌舞伎圖屏風 (山田氏藏)
- 同 前頭 男女風俗圖 (東京美術學校藏)
- 同 春章竹林七妍圖 (東京美術學校藏)
- 同 豐廣水樓遊宴圖 (桑原氏藏)
- 同 懷月堂安度遊女禿圖 (東京帝室博物館藏)
- 同 婦女圖 (九鬼氏藏)
- 同 師宣半面美人圖 (東京帝室博物館藏)
- 同 湖龍齋吉原仲之町圖 (渡邊氏藏)
- 同 豐國炬燵美人之圖 (大場氏藏)
- 同 北齋美人之圖 (團氏藏)

如月



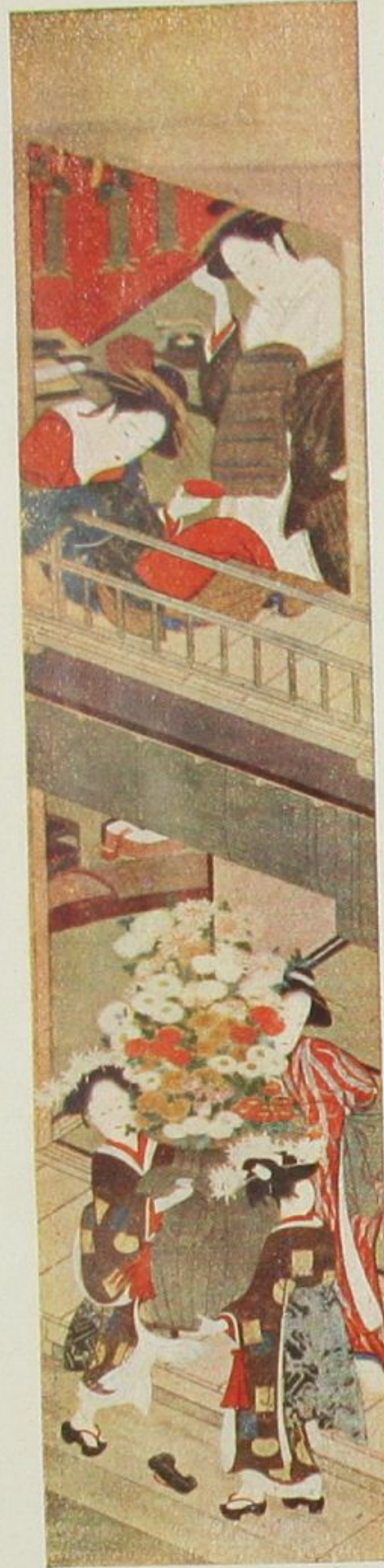
彌生



江戸時代に、浮世繪師として、獨特の畫風に異彩を放つてゐた藤川春章筆の、此の美人十二ヶ月は、松浦伯爵家に所藏され、春章の代表的傑作として有名なもので、松浦家に世襲財産として傳はり、未だ曾て門外に出されたことの無いといふ貴重品であります。それが今回浮世繪展覽會に出陳されたので、非常な人気をよびました。婦人の年中行事を題材として、十二枚に畫き分けたものであります。睦月(一月)は紛失してしまひ、汐干(四月)も紛失したので、後になつて繪師に畫かして補つたものであります。他は全部眞筆であります。一枚々々に見て行きますと、繊か、筆觸、麗はしい構圖のうちに、過ぎし世のなまめかしい婦人生活が、美しい夢の繪卷となつて、ほのぼのと浮んで來るではありませんか。



月ヶ二十人美



月長

月葉



月文

月ヶ二十人美

月無水



月泉



月卯



黄綱花下遊宴圖屏風

(京都室町)

前頁

文

言

一







の浮世俗を愛鑑する、肉筆を善くふよを版畫  
とも古くふよとある。絵のうらを肉筆に拙て  
版畫の成印してあるよがある、双方成印とも  
よよがある。度々ある肉筆ハよよあるか  
版畫ハよよ、北のよよと版畫ハよよの肉筆  
も北のよよハよよ、概して本給をよよハよ  
の肉筆ハよよ、版畫の下給としてあるか  
版畫ハよよ、や摺りをよよハよよハよよハ  
よよハよよ、版畫の進歩ハよよハよよハ  
概してよよハよよハよよハよよハよよハ  
よよハよよハよよハよよハよよハよよハ  
術が北のよよハよよハよよハよよハよよハ

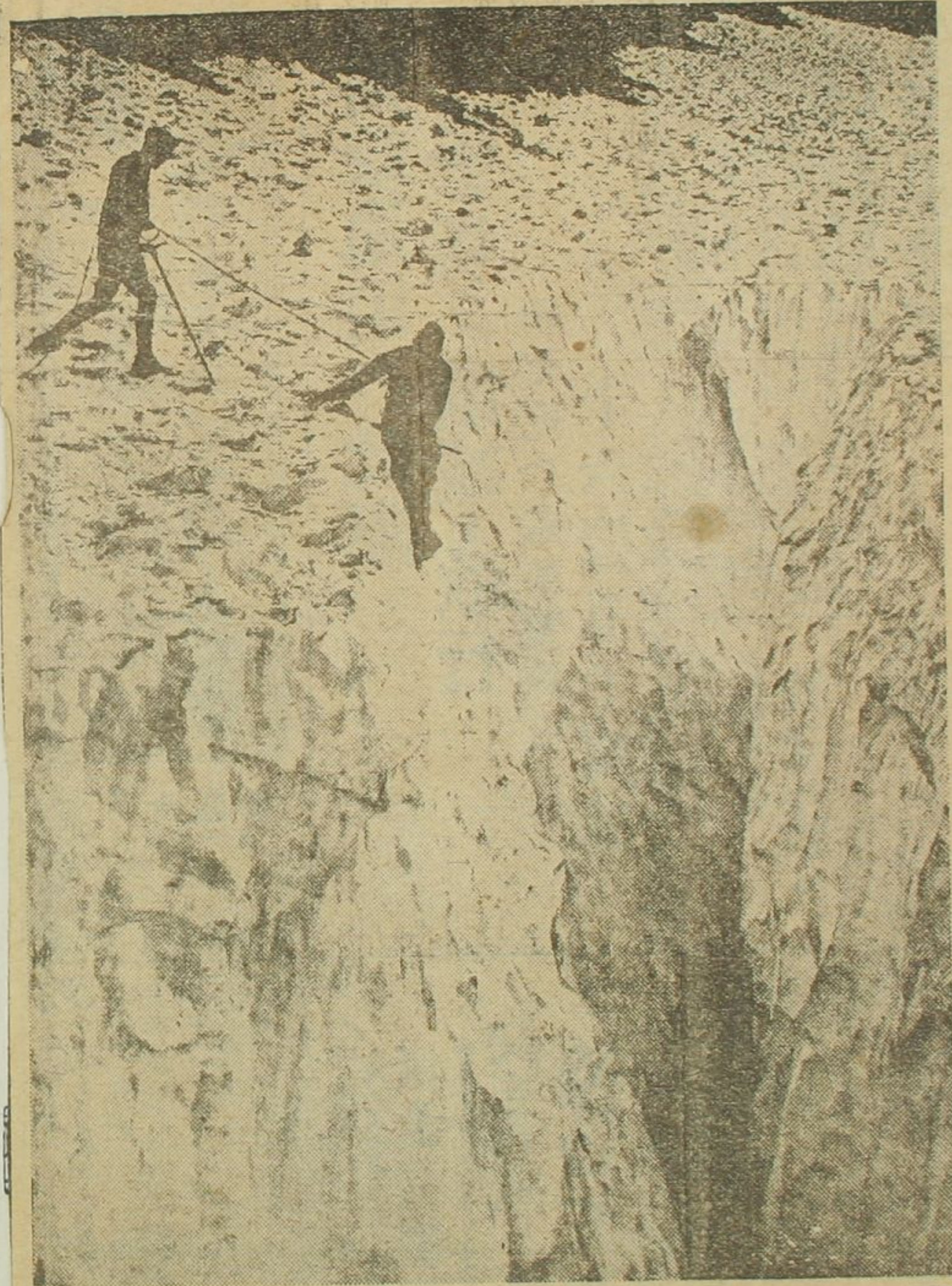
に足茶がして拙を、儀るよよハよよハよよハ  
畫ともよよハよよハよよハよよハよよハ  
ハ、版刻と摺の進歩ハよよハよよハよよハ  
いに氣味がある。

絢爛研と事小、奇位、歌麻、清夫の美人、俗  
も各々よよハよよハよよハよよハよよハ  
ツタリ、夢の物がある。色氣のよよハよよハ  
よよハよよハよよハよよハよよハよよハ  
あり又張がある、志のよよハよよハよよハ  
がある、士分の業、曲をを聯想せしめ  
の、廿五六年の世を善くのが得るよよハよよハ









夏知らずの高峰

日本アルプス白馬の雪谿

掲げた山の峰が、おぼろげに霞を穿ててある。圓光が佛の如く、  
聖の影を、揚出して、あつた。山の峰が、おぼろげ  
の冬照を、こぼして、あつた。

○世の中も、浮世とも、おぼろげに、浮世の、浮世の、夏  
楽界といふ、意がある。エロティックな、おぼろげの中、  
と、おぼろげな、後者、給か、女子の、性慾を、  
おぼろげに、美人の、性慾を、おぼろげに、  
世給ひ、おぼろげに、存在する、煤灼とも云へ、得よ  
う、おぼろげな、私寫子、皆、浮世の、おぼろげな、  
杖で、私寫の、圓光、おぼろげな、得よ、おぼろげな、  
の、浮世給ひ、日本の、社会、おぼろげな、  
の、おぼろげな、本能、おぼろげな、  
の、おぼろげな、本能、おぼろげな、  
の、おぼろげな、本能、おぼろげな、







◇海底の神秘

海底画家ブリチード氏筆で、飛行家ナンゼツセル氏との奇しき因縁のまつはる作



○ 坊間の色衣を縫う二三の女をひらき  
の次よの内なる

田楽相談

昔より十一年

の次十二年州股の箱巻

巻紙を大キり花月書お返の紙

巻末の巻紙

社長小宮原美次

幹事田島家二

花柳歌巻に漢文漢詩も混す

藝妓の字を貼つて挿巻

こかこころいれ也

今紫(姐)奴(妓)濃紫(姐)小紫(姐)



柳亭(妓)右近(男)

徳川田島任天の画七散見す

一 龍山北志

龍山北志

初二篇

明次十二年版 活字

九春社蔵

京極新志の伝載白紙本

芳原書物也

二篇の主に芳原の大事曆を掲ぐ

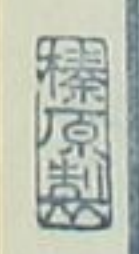
一 親筆集

全三冊

明次二十年書り

花柳書物也

此等の書は近年時代紙のいふものも同業



お供珠はおあ〜く一環とあるをさ  
こを得るは、お供珠 或の能也

一 飛樂南文庫

十一冊

明次廿一年おま山人の刊行し、おま 山人

今之をとりてと難し、山吹何人か原

本を其後ヲフセウトに、おま 復知るん性

こ入る出版すいくむくもさるんす

吹散いしとるといふ、おま 友社社人の

おま心多く載せあり、余りともなる

因縁あり、おま 阿闍梨の時を追憶するもの

少あり、おま 眉山人の筆致を愛し、おま こ

ともあるが、おま 敢て一書を讀む



外に二三の回書も添ふ。

擬朝議

二冊

仁井田好古著 文政五年

藤原好古著

勝海舟花を各冊送法印

穿人状

浪人様来也

一冊

松倉開版

新刊 双六

一枚

歌浦花の八重垣

崑岡炎の

一冊



書林拾遺

二冊

○来年七稀の宴を申しつゝからまゝ記念の玉藻  
が随筆一冊を出版せんと心がけ、此夏の休  
中を利用してそろそろ書き初めんと擬す  
何を特徴とすべきやいかに思ひつゝのぬ  
回顧録といふ柄あるまゝ七稀の記念  
をさしりし、か自今よりのこの面白く  
るいから、材料は、可成り凡そと得ぬ  
差向にんせいの随筆に収めようといふ稿  
かいくはくかある、その向あつたえと、きよ  
かあるか七稀の、覚えのなると、書き初め



- 一 鞍山陽と修善の
- 二 畏怖の経記
- 二 戊辰の回顧
- 一 浮世待て乾て
- 二 漢院の思出
- 一 小町権一と其日記
- 一 表りし巻
- 二 活字図録 一 活字初頭の影写版
- 一 徳重家細江中河
- 二 早稲田の回顧
- 二 近年時代の心算
- 一 坪内逍遙の海草

徳重

- 一 考名の考を記す
  - 二 余の家系
  - 一 圖書院協会 願河に推すの経記
  - 一 余の著述評 内田外史
  - 二 余の政治経歴 （このあたり）
- えんぶ物に列挙すると回顧録におおむするけい  
 ぶ材料ハ今後異選擇を要す、今あるもの  
 方針を定めの多の方がよろしい 七月十七日
- 全冊を七冊に分りて七秩を寓し、十年の間  
 を一編として年代を這う経歴を綴すも  
 一冊未だりしとせし、但し経歴談が自家宣  
 伝に墮し七てを注すべし、



○外山翁三ゆき其の父外山備左の侍と寄  
て来り、翻漢如人を遣信するの術に修くた  
るを起し、余の採用を帯び、如めし大改に  
出張するや、未だ此人を知りず、翁余を訪ひ  
来り、一夕余翁の事を共らんと需めんと、余翁も  
某位京都：公早と共らんと談論を交わ  
る、又次未だ五十某の年輩と共らんと交わ  
る、余翁の如くして河合を修し、如の事蹟と詳  
か、又修り、信ら大改任備左の事、日本に流布  
の由、信所を大改に没けたる甚心談ぶと、聴  
き、略々翁の為人を知り、翁之畏敬の念を  
起し、未だ翁の文つり、翁の中の如くを

を訪ひしことも一再あるあり、確かに吾翁四  
十の如く一人物ありし、此翁記を後み、翁の  
誰の軒雲といふこと、翁京都に於ける別  
邸の茶人、翁村翁軒の意、翁なる事、○河  
合が三島中島の同言する、こと等を、知り得る、  
七月廿日記

○余の至幸する日、海印印刷社社長電を徴し、各  
席款を掲げんとす、余乃ち油断大敵の四字を  
書す、余社員と後らんとす、余社信款増進を  
期し、社業明補に進み、然れども一刻も  
七の断を許さず、此の四字款社員を、  
の外別に大切の事と、翁も、邦俗懽意と







亭の又い舊の如くないに和南の楽習を修りてみる  
此の由天氣才もいふ自勸車と認つて十  
六年 振りの酒のそえん心ま婦に近年志なく  
臨溢血に罹り流し四回に及びつとそあり、おは  
広せず五勸きみなる。生ある掛物をもも時四  
後うそ酒次四時<sup>も</sup>道憶えん心もりの感  
まを清を禁し侍らうらた。五定年、湘南花  
六と植すに今飲の折地の喜の入まといふ  
か似れといふと、透麗錦と名を選人心か  
まの後のこゝま来るこゝもさくお過き三友ハ  
改に地ちの人ときうそんひとり存することと思  
ふと感流に無量いあつた。硯引室のそあるの

硯引室

紙と透麗錦の二字を換者し主婦、此  
へ中津の洲を畫すの作。撰名の次方を後う律か  
又詞を畫つたの、時秋のこゝらがある 七月十日誌  
〇昨日書林をも(き)森林主之の詩歌を録し  
たる墨蹟不點も獲り、圓寺地味も於て  
日ぬの光景もるんも、其墨蹟の千も入るハ如  
めれ也

映み甘芳安水散層、和風香雪玉成堆  
山山郵赤衣者花安、終日君前侍百五  
山橋千樹花、向使帶卷、自是  
香風下酒量分外加



あま姫(君)の御国の桜花

白(一)二雪の中歩(五)身(一)

花を出(二)又(七)入(三)る花(三)子の

かほ(一)り(一)あ(一)き(一)春(一)の(一)あ(一)る(一)

花の香(一)ひ(一)と(一)降(一)し(一)つ(一)や(一)酒(一)の(一)味(一)  
月(一)方(一)を(一)出(一)し(一)み(一)共(一)し(一)老(一)に(一)酒(一)

乙酉四月廿五日阿部正桓君岡山山崎園中  
有看花宴(舊)是(舊)有士族十餘人皆應  
招余(二)侍(一)安(北)地(遠)隔(中)塵(清)幽  
似(仙)境(不)脱(二)歡(一)意(評)未(連)三(語)



以備笑說

未(至)空(家)未(林)之(印)

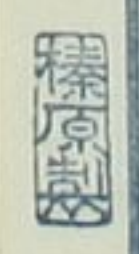
○内府又寛が七稀系に金時式内祝りして叙位の  
人四る數十名を工部省御楽部と招待(一)つ(と)白  
か(ハ)ト(一)ス(一)し(一)マ(一)ス(一)タ(一)リ(一)の(一)格(一)に(一)日(一)に(一)行(一)て(一)準(一)ず(一)侍  
ニ(一)輪(一)旋(一)す(一)儀(一)一(一)事(一)中(一)外(一)若(一)か(一)き(一)余(一)分(一)り(一)舞(一)舞(一)  
旋(一)ち(一)す(一)す(一)の(一)身(一)一(一)き(一)縁(一)因(一)と(一)も(一)不(一)慮(一)き(一)か(一)自(一)分(一)  
か(一)當(一)と(一)言(一)と(一)せ(一)と(一)ん(一)北(一)故(一)也(一)割(一)合(一)に(一)面(一)倒(一)ら(一)る(一)席  
次(一)を(一)定(一)ま(一)る(一)こ(一)も(一)り(一)此(一)が(一)如(一)めて(一)一(一)徑(一)踏(一)を(一)得(一)た(一)  
何(一)ん(一)の(一)身(一)も(一)も(一)席(一)次(一)を(一)定(一)ま(一)る(一)面(一)倒(一)の(一)こ(一)と(一)も(一)  
ま(一)の(一)身(一)も(一)も(一)席(一)次(一)を(一)定(一)ま(一)る(一)面(一)倒(一)の(一)こ(一)と(一)も(一)  
旧(一)年(一)也(一)ノ(一)一(一)ン(一)テ(一)一(一)ブル(一)ハ(一)大(一)抵(一)の(一)物(一)二(一)三(一)十







ムと柱けの帽杖受返の毎連と自動  
車の混雑を云々記すと云々なり、宴會果  
つとせに出口の雜遊の定て云々各々  
自動車に乗るまむと或十分を要す時  
夜の柱力此方面にあつての干配しお高  
毎連に掛き得りども混雑の終に何  
得たりし洋のゆりの友人云く、日本人ハ混  
雑を總動しとも自動車一を待たせらるる  
習俗ありの又云々云々、臨時に倒ひて自  
動車を走らむ見栄を張つて待たせらるる  
この女ハ一瞥に、英王女出たりてハ  
斯の情ええと批録自動車一を走し、宴



會終の地位あるものと云々、徳歩ありて出  
行き或ハ地下鐵道に乗り或ハ余上車  
を倒れ、故に退出の体え云々も混雑を  
見ずと余笑つて曰く、英王の習俗に合格  
するもの余の如きハ乃ち一考と、余ハ常に  
用タリと乗つて例とせん也 七月廿二の記  
○本年數月、直り及故を教心理して保存の法  
を講す、家の経歴自家の履歷に關する文書は  
是中のアルハハ、收めて保存文書と爲し  
家考之部と爲す、尚ほ阪刻一枚摺書付地  
圖錦繪新紙断片、尋の史料に供し得  
べしとの、鶏肋拾髮」と題する四冊のアルハ













古いものが懐かしさ映し電燈の世のかりるにホ  
 ット的さく見ゆるのが人を呼んで涼さをもて人あ  
 を待つ女がみえその姿がまよひ人を惹いた。今  
 の時氷尾、コレ一まどの前身とも見うへきこよ  
 りが此の女の割合を望み淫猥の海汰ハる  
 つに、いさゝこの縁を投するに、懐をあげて涼  
 を納まふことが出来た。まこは三々五々傷  
 然りあり合ふよと互ひて移を変へて天は魚  
 ドも一は社交倶楽部ひもあつた。自分の  
 の沈みゆくを東東と来は流るまよひしつゝか  
 あつたか今この園を見るも外に親うよ一も  
 まの。偶に江戸生活研究を感する人のちぎ



あつた。改証が出た。此國もさうな時分にはあ  
 びある。今僕らも末尾の「一」を「二」に改めおこ

で、漸く盛つて来た麥湯の女も街頭に  
 見えなくなつた。だが、それも一時の  
 こと、嘉永六年八月には、

近頃夜中往還え麥湯見世出し候も  
 の、殊の外相増、何れも深更迄、  
 其中には年若なる女子等湯汲に出  
 し、如何之儀有之段相聞候麥湯商  
 賣の類、往還え夜分罷在候ものは  
 一般に四ツ時(午後十時)より追々  
 相仕舞、九時(午後十二時)限り引  
 拂候段、店前の者并家主より心附、  
 廣場等は見守いたし候町々より心  
 附け申すべし、  
 と觸渡さねばならなかつた。

や。下り油、地油、文化の恵みは何よ  
 りも燈火が先きであらう、二度喰ふ飯  
 が三度になつたも燈火のお蔭さまであ  
 る。江戸の人間も段々に宵張りの朝寝  
 坊になる、八百八町は夜も眞夜中まで  
 賑ふ、といふのも燈油の供給が多くな  
 つたからである、さうして暗さが減じ  
 た。しかし米一升より油一升が遙に高  
 かつたことを忘れてならぬ、文化の恵  
 みは決して安價なものではない、其の  
 高い油を費して麥湯の女の元氣の好い  
 笑ひ聲を聞く。  
 此の明暗の計算が我等には頗る面白  
 く思はれるが、數字だらけにするでも  
 あるまいと爰へは見合せる。是非云ひ  
 たいのは頭から暗の女と呼ばれる筈の  
 麥湯の女が案外に金城鐵壁だつたこと  
 である。斯うした處で茶代を餘計に奮  
 發すると馬鹿にされたさうだ、茶代が

櫻子の

寛文八年から散茶女郎の店頭に魚油の  
 烟が黒々と起ち、遂に夜の世界になり  
 果てた。其角が吉原ばかりと暗くない  
 のを感じたのも、其處に太夫といふも  
 の、無くなる豫備だつたのを知るや否

多いと笑はれるなどは興味豊かな話では  
 あるまいか、江戸の嬉しいのも此の邊  
 にあらう。

○細川書本主も、轉経放一冊と銘ら、此者大徳  
 寺義統禪の著す所も、轉経るるの法に  
 依り経巻を翻轉して以て清福の代り也  
 其の古くは行はる、所謂一切経念るるもの  
 こんとす、宇況平芳院徳園劇神流之を  
 以て是を、まじく大花経の大部の経典を  
 彫版の術を、時々の留るるや其の  
 室に大なる其の成つて先く、や供養の念をも  
 設け、轉経の式を行はる、いし謂はんあ







くハ儀り受けんと申し一々其處に永く家三  
すると云ふて手離さう一々人の比似れ  
の園たわし一箇来り家取敷心配の考め  
却るる一但し五石圓るむと云ふと  
くもつても其に買入るべし方を申し  
ハ園者購入に念を絶る今日再び指を深  
くハ思のめはゆるんも一を他仰人の手  
る委せんも遠慮のさうり且の前年一京山  
の書簡を回家り傳りきけ雪嶺の由未  
を余の愚業に收めたる因縁もあらん破格  
に購入を申し入んたる也  
七月廿四日記  
○代筆の一二名高士より寄つてらんたる六枚の



寄入るとなぬぬめあり一前三枚の繪合の  
一画ハ情と花するも并秋天の像うて衣類を  
脱し去んハ亦三葉の如きこのとある他の三  
枚ハ繪の端の并秋天也此繪を  
亦三枚の攝影を致し右二種ハ  
物に續合代の位と思ひらん然るに  
所花の分繪の端の比はすんが  
代りきをいんハエロテの訴究と難  
くハ斯る秘傳を世にまてけ出す  
るハいんハびつたの世にといふ  
七月廿四日記





標原





標原





標原製



# 貸本屋と軟本

西原柳雨

今日の如く出版が容易でなく、又圖書館などいふ便利なものが無かつた江戸時代に在つては、書物といふものをさう誰も容易く手に入れて讀むといふ事は出来なかつたのである。そこで貸本屋といふ商賣が、況く且つ盛んに行はれたことは當に必然の結果であらうと思はる。而して最も愛讀せられた本はどんなものであつたかといへば、勿論其の時代の思潮に投じたものであつた事は云ふ迄もないが、貴族、武家、其他特別階級に屬する少數の者は別として、中層以下一般民の教育程度は甚だ低級にして、目に一丁字すらなき明盲が非常に多かつたのみならず、商工などの家に生れたものは却て學問などすることを僻事のようにさへ思つてゐたのである。川柳に

徳に入る門を覗かぬ明盲 (文化)

とあるは湯島聖堂にある入徳門を潜つて初學徳に入るの門とされてゐた大學一冊習はぬ爲に一宇も知らぬとの意であるが、其他

定紋を自當に無筆募参り (文化)  
無筆同士どれが馬やら鳥やら (天保)  
などの句もある。又全くの明盲でなくほんやり薄明りぐらゐは辨へるのには、  
鰻といふ字だもの當讀にかつを (天明)

日背負ひ廻つた所で恐く一人の借手もあるまじく、先づ以て大閑記、三國史、曾我物語に八大傳、いろは文庫や梅曆、藤栗毛乃至は八笑人といつた様な軍書、敵討、靈現記、人情本、洒落本等など主要なものであつた。又貸本屋の特に大事な御得意先は先づお寺参りか孫の守の外には仕事のない御隠居様、女好だの里遊だのと碌でもない表徳を附てのらくらしてゐる若旦那、お化粧と旦那の鼻毛を數む外には用のない外妾其外夜を畫なる浮いた稼業の藝者や娼妓などが主なるものであつたとすればその選擇せらるゝ書物も自然軟い中にも軟い、人情本や好色本が多く持て囃されたことは云ふ迄もあるまい。北齋だねと摺物を撥で寄せ (文化)  
の摺物が何であるかを此處に詮議する要はない、撥でかき寄せるといへば永い畫を火燧槽の爪弾に飽いて伸をした處へ貸本屋が廻つて来た。妾宅か藝者屋かの場合とすれば餘り堅いものでないことは直に推想せらるゝ。但し何故に北齋を擔ぎ出したかその句構はよく解らぬが、北齋も半面には随分妖艶なる軟筆を弄してゐた

魚偏に夏なら鯉さ、目に青葉山時鳥初鯉」といふ句面の通り鯉は四月のものだよと物識顔をする奴を諷罵した句であるが、爰ぞ識らんや句主自身がふぐといふ字の楷書を知らず、魚偏に夏と思つてゐるなどは聊か慄られる感がないでもない。  
林といふ字拍子木と讀みもよみ (天保)  
林といふ字を見て木が二つ並んでゐるから拍子木と讀んで、さうぢやあ無い、はやしといふ字だと教へられ、なかに唯子も拍子木も同じさと減らず口を云つたといふ落語そのまゝの句もある。

讀みもよみせな、りきんであめ大師 (文化)  
帷子の賣上帳に雉子も見え (天保)  
手紙には狸臺には鯉を載せ (明和)  
源兵衛藤吉と思つてる無我な奴 (文化)  
兩大師を雨大師と讀んだり、狸一尾進呈仕候と書いて鯉を贈つたり、かたがらを賣つて帳面にきし一反と記したり、源平藤橘を二人の人の

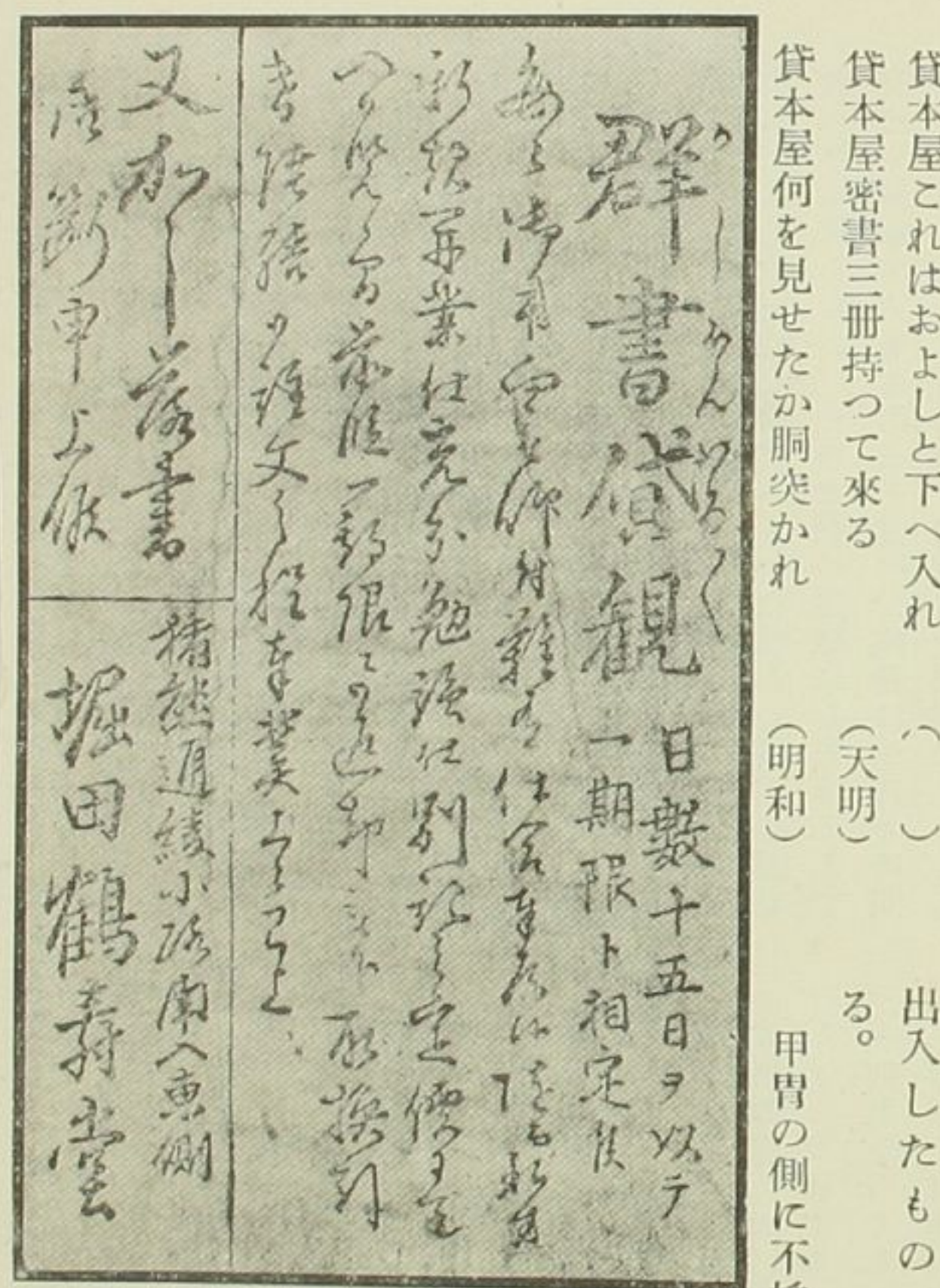
名と思つてゐたりする位の間違は寧ろ珍しくないのであらう。  
山形を眞のへの字とせな、讀み (文化)  
大根種ありは村での能書也 (明和)  
山形をへの字の楷書と心得てゐるなどは随分滑

などはこれ以上に説明を加ふる要はあるまじ。猶狼本に就て味める川柳は随分あるが、孰れも赤裸々に過ぎて御座敷には持出せぬのが多い。以下列擧する數句は、明確に指定してないの單なる人情本とも又滑稽な畫本とも推定せられぬこともない。  
貸本屋これはおよしと下へ入れ (天明)  
貸本屋密書三冊持つて来る (明和)  
貸本屋何を見せたか胸突かれ (明和)

稽の談であるが、夫でも大根種ありと紙に書いて戸口に張るとは兎も角もその村での手書きである。  
姉様の助太刀でよむ敵討 (文化)  
等も一寸こゝらに挿んで置くべき句かと思ふ。(明和)  
節用を控へて庄屋したゝめる (天保)  
いかめしく節用を繰る名附親 (天保)  
又節用かと使は大あくび (天保)

江戸時代の百科辭典ともいつつべきものに節用集といふ重寶な本があつた。村一番の物知りといはれた庄屋殿の座右必須の寶典であつて何を聞いても節用、子が産れて名を附けてと頼んでも節用、一寸使を待たして返事一つ書くにも節用である。  
御觸何といふ字が五つ六つ (文政)  
讀めぬ字を何といふ字によんで置き (明和)  
書物讀み讀めぬ所へ鼻へぬき ( )  
是等は無理もない事として、傷寒論位は朝飯前といつたやうな高慢ちきな面附をしてゐる立派な御醫者様でさへ、  
唐本は駕に乗る時ばかり入れ (天明)  
駕では無點假名附は内で讀み (天明)  
醫者駕で讀むのを見れば太平記 (天明)  
といつた調子であるから、況して普通の市民など

片假名に四角な文字は手を引かれ (寶曆)  
の如く、振假名を力に本を讀むのは當然であらうかういふ教育の程度であるから、貸本屋が四書五經史記左傳等の如き日だの、十六夜日記や伊勢、源氏乃至は徒然草などの如き侍ものを一  
出征兵士の間に密賣せられたと聞いてゐる。  
具足櫃中に聖天摩利支天 (天明)  
白拍子阿房らしいと四五枚見 (天明)  
魔利支天は武運を守る神様、聖天は象頭人體の抱擁の神體、白拍子は烏帽子水干に太刀を佩き男舞を演じた鎌倉時代の舞伎にて随分陣中にも出入したもので、それ以上の説明は必要である。  
甲冑の側に不埒な書を晒し (安永)  
お虫干土佐の名畫 (文化)  
でお虫干オヤ、 ( )  
と下女は逃げ (明和)  
ソリヤ、と具足を ( )  
仕舞ふ暑氣見舞 (明和)



最後の句は具足櫃を引つ繰り反へして中のものを一杯取散らして居る所へ暑氣の見舞の客が見えて大狼藉の體である。



ことは人の知る所であるから必しも美人に持て  
ないとは申されまい。  
鶴に蔦火燵の上に二三冊  
是亦赤い火燵布團の上に當時繪本問屋として知  
られた日本橋通油町の鶴屋と蔦重とから發行し  
た三冊物が散亂してゐるといへば決して眞面目  
な家庭を詠みたる句でない事は明かである。  
俗な畫合せ歌麿や榮之なり  
西川畫氣も消えく〜と下女ながめ (寛政)

オヤ馬鹿らしいと本屋へぶつつける(文化)  
好な乳母本屋を叱り〜見る (安永)  
この本は屋敷おもだと貸本屋 (明和)  
貸本屋無筆に貸すも持つてゐる (明和)  
清少納言御筆と貸本屋 (文化)  
又昔武士が戦陣に出る時に具足櫃に秘畫を納め  
置けば武運目出度しと信ぜられたとあるが、戦  
場の無聊を慰める爲でもあつたらうか、日清  
日魯の戦役當時にも随分如何はしい圖畫が盛に

うかり来て本屋敷居にけつまづき (天保)  
貸本屋は本を高く積重ねて大きな風呂敷に包  
み、負佛をしようた六部よろしくの恰好で歩る  
いたので足元が見えず、うっかり敷居に躓いた  
り、鴨居に引掛つたりするのは無理もあるまい。  
筆豆な得意に困る貸本屋 (天明)  
貸本屋しよはずに廻る二十日過ぎ (天明)  
甲は落書、乙は月末に本代の徴集であらう。  
(終)

雑沓を別産保存し得る自入るを毎  
あふりて来るよりの内装に意味を乞ふ  
るもの切り揉むを扱めおくれは  
私に九切めこの敬禮をうけの切り  
扱きりふりて刊同者致協分難徳  
ニ觀するふ也  
七月廿五日記



○一書畫刺を通し余、山陽詩畫の鑑定  
を治ふに詩畫十枚板皆寄をへる中、  
翻釋のを缺き、真贋のち難きこのあり  
然るも概して正筆也此の字と中一三枚  
ハ茶器、文房の山陽の田録あるこのを  
す、其目如左

- 茶室 二枚 較り同形のものは  
田半江の画あり
- 扇面形木地類 刻云 玉光含笑
- 長柄茶筴 画
- 竹の烟黒 題銘刻
- 花の同 二重切 題詩刻



茶碗 煎茶 題詩 未未也

花瓶 題詩

茶筒 井二 運山陽縣

研 銘友出屏 井二 運山陽縣

扇 骨に山陽の銘あり

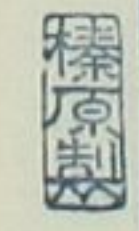
茶合 同上 井

茶枝 同上

茶ダンス 上二二枚の庄あり一枚春の一枚古庄の古を刻す

下大なる庄 山陽の題詩を刻す

骨董に山陽の詩書の刻字ありよ  
兼如斯く皇宮にあり余の如く晴



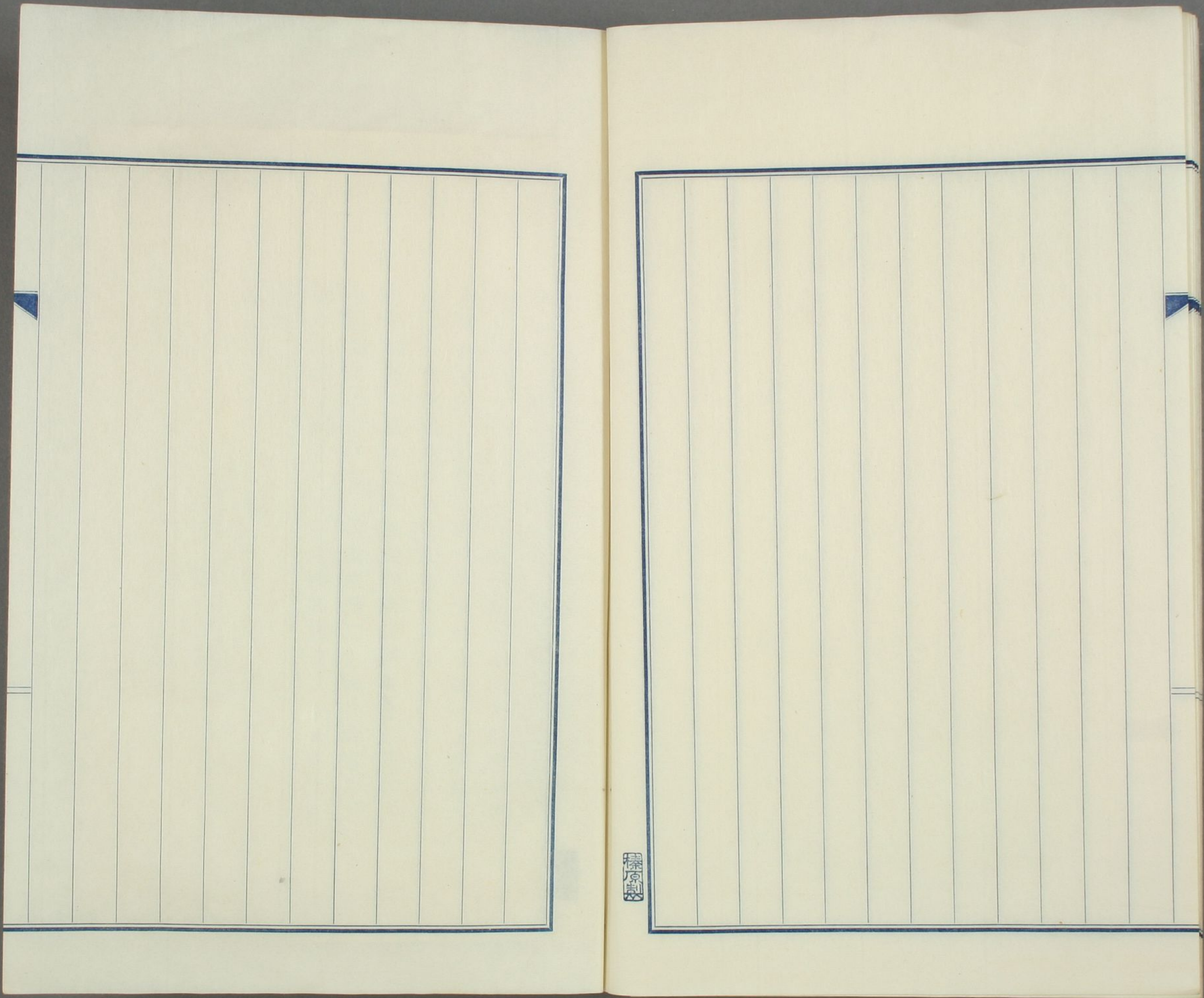
る所也 元何人の者なるや其未歴か未  
此紙を得ず茶ダンスの扉に書  
書るにありてあるに貴人の為り  
しきよの歎 研銀中 唯石の為  
めしきよの歎 骨董に属する三  
枚の字よの詩ひ受けて家と花せん  
ことを歴気す 七月廿五日記

花の字よのとおろすありしもの大和古の  
上北山村骨董高古堂(泰宗大和)と  
いふよの元此の骨董の未歴をやく  
みもとに京都極楽寺の所蔵なり今  
然又の先代推鳩が故ありて明治廿二年



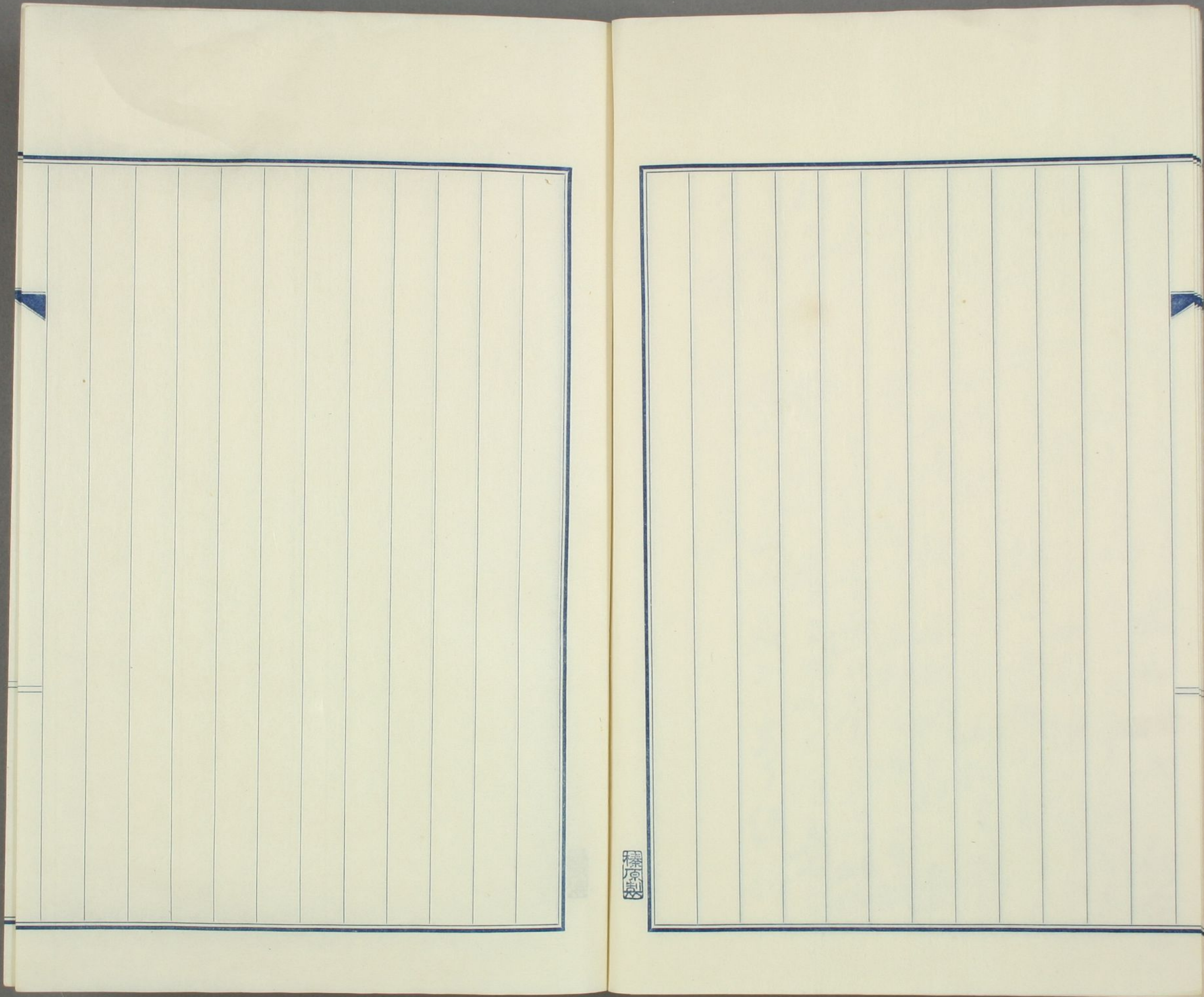
頃手離しはるるもよし。品物紀の新安の  
西といふ人の千二ゆしはるか。今三三きぬ南年  
妻那有井村羽市本西村徳下町の  
愛花の傳るといふ。此人の道河のよし  
余の地帯山陽縁とすし。西村より余  
三年しなる也。北商人現に西村所花の余  
の地帯を授けらるる。西村も道に千放  
すまあるといふ。そのき方西の産りとも。北後  
掬つてみる骨世とて。美の物とて。海を志せ  
り。字とて。海とて。よの七。荒干あり。統計  
三十點を授けらるる。





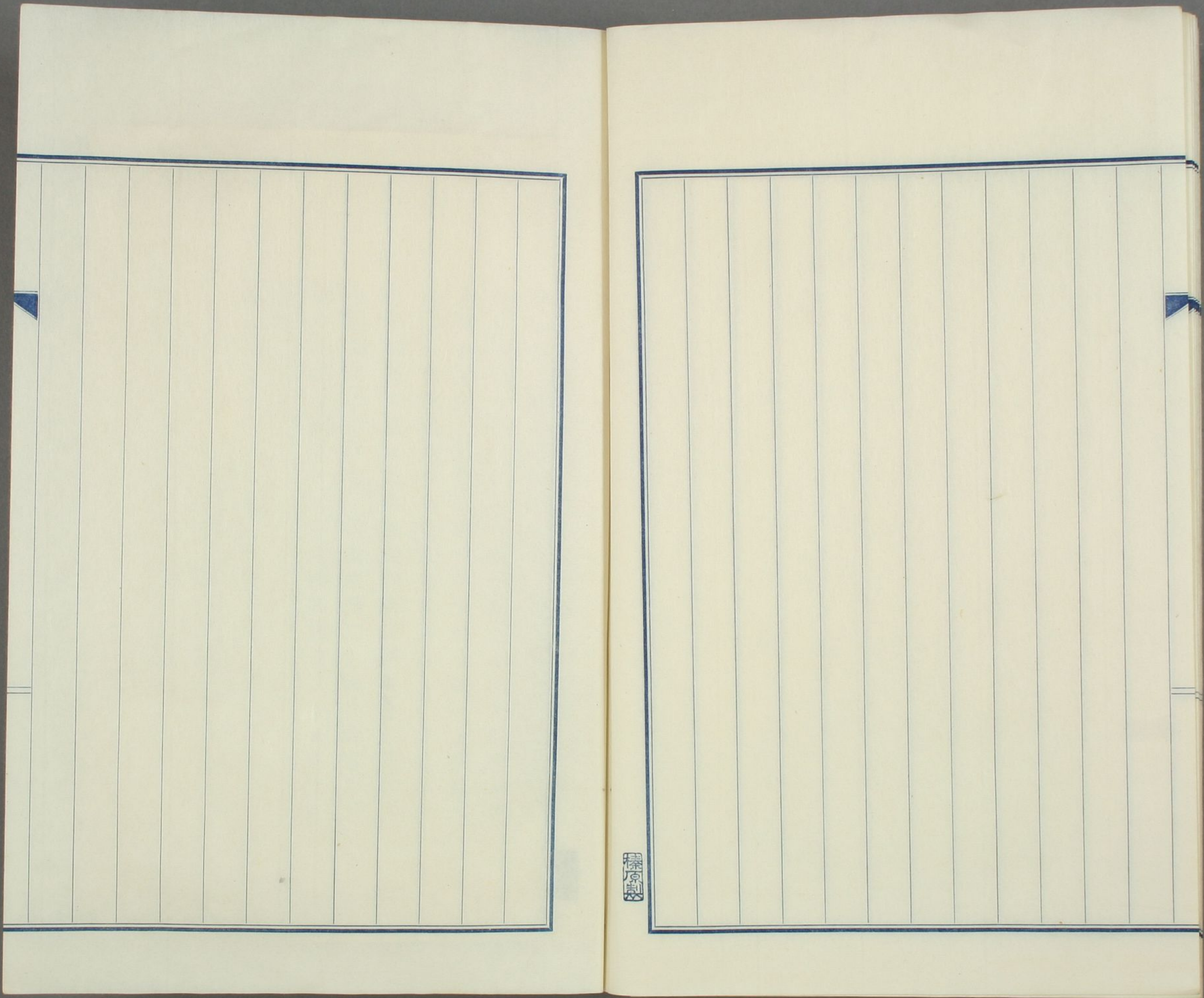
和蘭





標  
原  
文





和蘭



拜啓

暑中の砌お變りもなく愈御多祥のことゝ存じます。就きましては、當館開館二十周年記念として、後記の通り江戸城建築史料展覽會を開催いたし、當館所藏の江戸城設計圖(甲良、大島兩家所傳のもの)に、更に種々の史料を加へて高覽に供し度いご存じます。設計圖はすべて甲良氏累代の手になれるもの(中に數十点平内、辻内氏其他のものも含んで居ります)で、舊幕御作事方書類として極秘のものであります。其數約二千点、その中より寛永度造營以後元治度の假普請に至るもの三百点を厳選して、三越並に東京自治會館の兩所に出陳することにいたしました。前者は興味的に、後者は學究的に、それ〴〵對象を異にして列品して御座います。

尙會期中のある日を限り、知名の方々の御講演も御座いますから、何卒御繰合せの上御來駕下さいますならば、主催者の本懐とするところで御座います。

昭和三年七月

東京市立日比谷圖書館頭 今澤慈海

市島謙吉殿











